

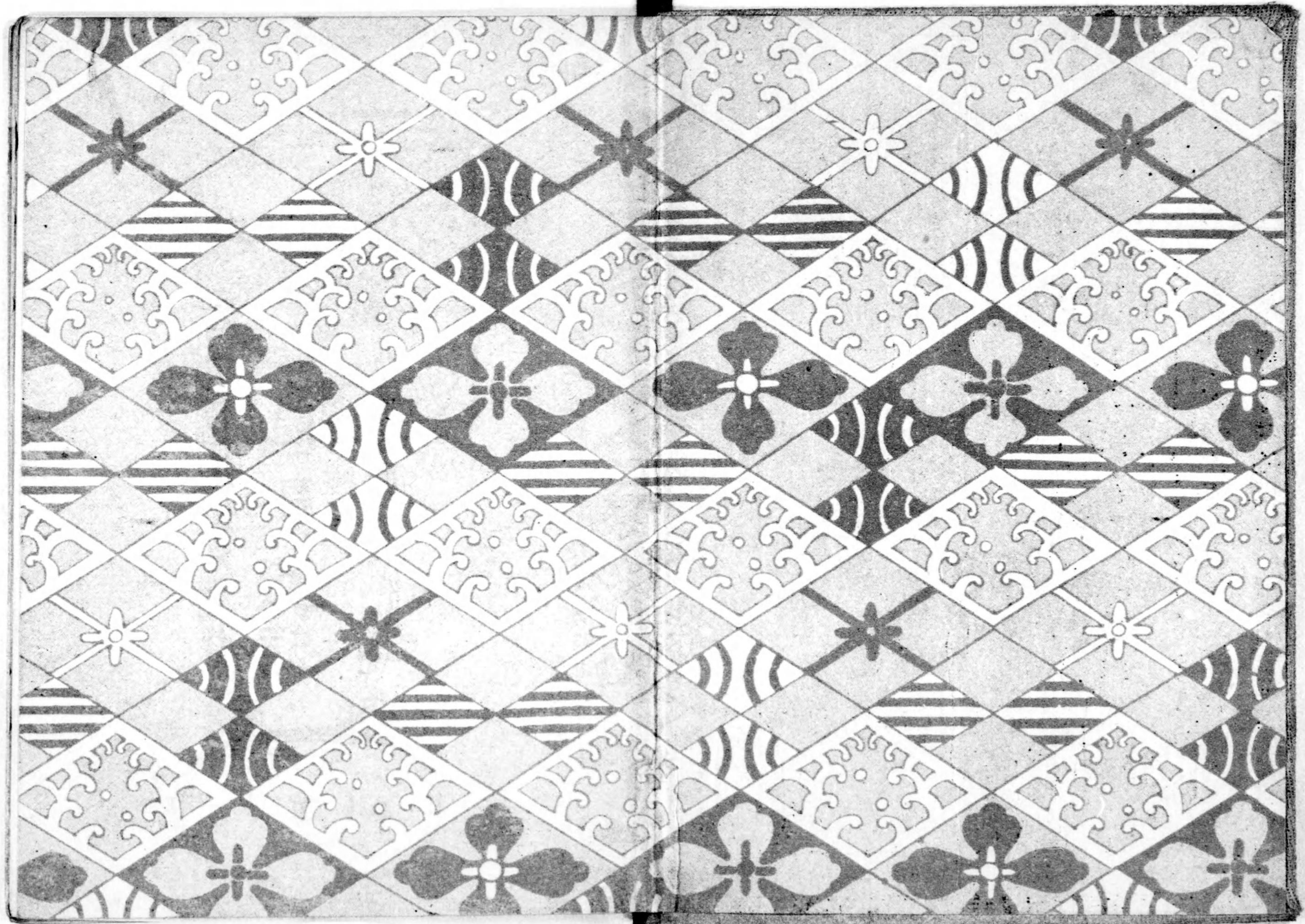
特 100
968

~~274~~

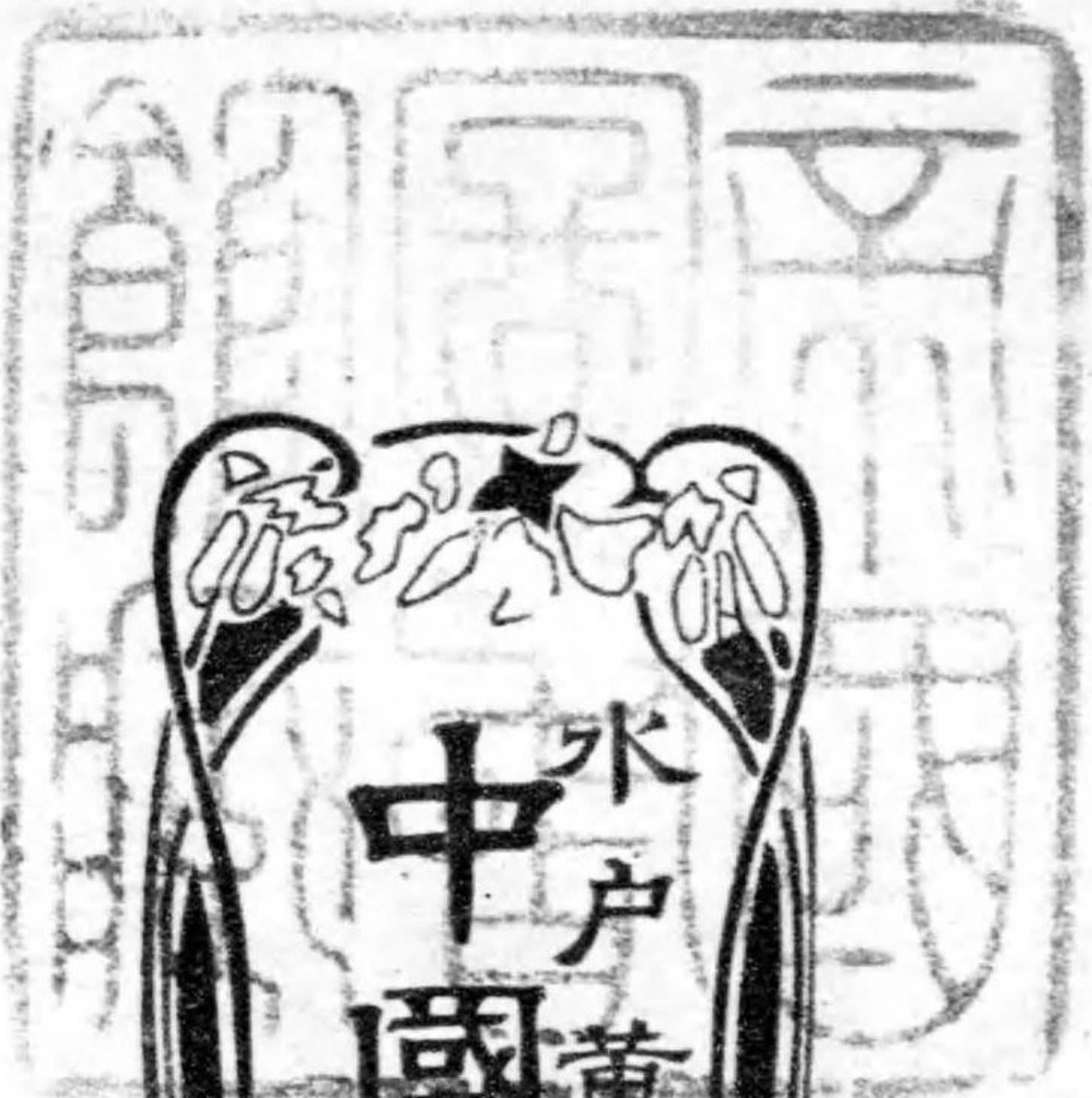


始





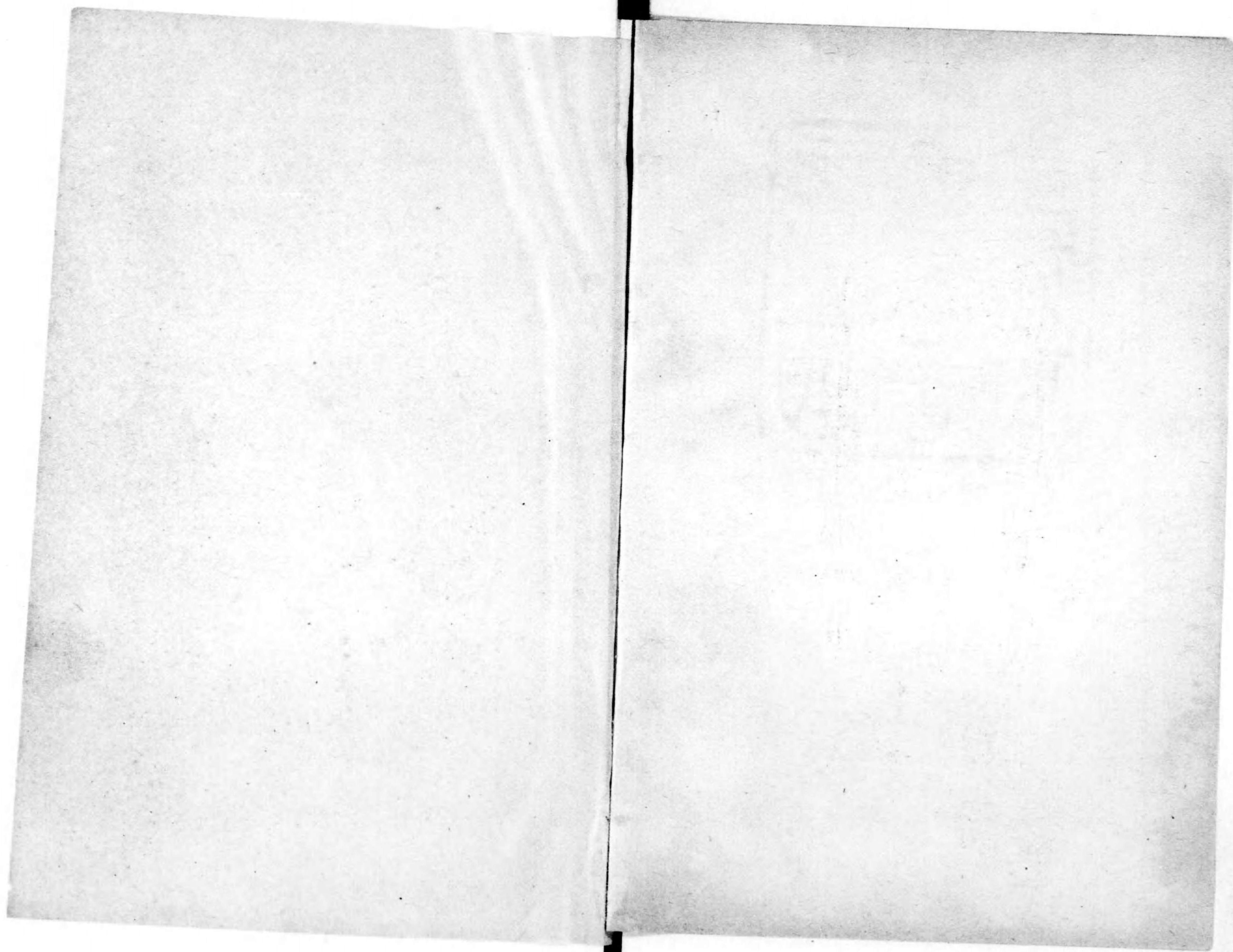
特100
968



水戸黃門
中國漫遊記

大正
2. 10. 14
内交







○秋の月もよいが夏の月もよい……………一

○怪しい二人の曲者……………五

○忠臣も何もあつたものじや無い……………一三

○一寸聞きたいことがある……………一九

○お咎めは受けても本望……………二七

○お前さんたちの性には合はぬ……………三三

○常陸から兵庫まで詠へに来た……………三九

○貴郎も餘ッほご剛情な……………四五

○大變なことが出来ました……………五〇

○そりや雪と炭の相違……………五七

目

次

- お前さんは中々感心じや……………六四
- 水戸の殿様御宿……………七一
- お金の代りに仕事です……………七七
- 櫻の木にお塞銭……………八四
- 五兩の金を出せば許してやる……………八九
- 下手人は私しや……………九七
- 大金さは僅かに二十兩……………一〇四
- 矢ッ張り只物では無い……………一一一
- 泥棒の頭は土地の代官……………一一八
- 大變なカン違ひ……………一二五
- 水戸の豪いお方……………一三一
- 夫れが即ち御短氣……………一三八

- 已れも敵の片破れ……………一四四
- 云ふこそ聞かれれば家を焼くぞ……………一五二
- 奉行さんが盗まれた……………一六〇
- 何らいこツちやく……………一六六
- 今度は公然の登城……………一七二
- 國遠をしたくても出来ぬ……………一七九
- ダク！と黒い血を吐いた……………一八五
- これこそ眞實の渡りに船……………一九三
- それは一時の口實……………一九八
- 神罰が當りますぜ……………二〇八
- 守り札の利き目……………二一六
- 三通りの御膳は出来ません……………二二二

○光圀卿の爲せ者……………二二九

目次終

水戸中國漫遊記

辰々堂編輯部編纂

○秋の月もよいが夏の月もよい

從三位前中納言水戸黃門光圀卿の漫遊記は曩に東國、東海道の二編を執筆したところが大變な好評を以て迎へられ引き續き中國を發行するようご屬々大方諸君よりの御所望によつて此に本編を上採することとした、が何がさて單に西國と云ふた處で中國もあれば西國もあり九州もあつて是れを詳しく記したなれば中々一卷二卷には納まり切れる筈は無い、そこで管々しいことは凡て急行列車で飛び越し只だ其内の最も面白に趣味のあるところだけを摘むこと

にした。

さて東海道の部ではお氣に入りの佐々木助三郎、渥美格之丞、それに龍宮の萬五郎の三名をお伴れになつて大阪までお越しになられ、天王寺東門前で乞食姿に身を扮して居る永井紀伊守の臣、結城勝太郎兄弟に計らすお逢ひになり、兄弟は父の仇を討たんために様々な艱難辛苦をしたことをお聞取りになられ不憫に思召されたこと云ふところまで記したが、それから後のことを書けば中々長くはなり然も光圀卿の御漫遊については餘り深い關係もないから是れは例の急行列車で飛ばして只だ兄弟の主君紀伊守へ御書面を遣はされ、理否をお説きなつて首尾よく怨を晴さし次で兄弟の者は再び永井家へ歸參も適つたこと云ふことだけに筆を止めて置く。

光圀卿では相も變らず百姓風の御姓で常陸天神林の百姓光右衛門、格之丞は百姓の若者格八、又た助三郎は同じく助八と云ふことで大阪の道者宿のよう

な旅籠屋にお泊りになつて居られたが西東の町奉行は毎日御嫌嫌を伺ひにくる興力同心の手合は夜に日に隆ながら警固を申し上げる、そこへ京都から所司代は使ひを以て是れも御機嫌を伺ひにくる公卿達からもお使ひがあること云ふ風で次第に大業になつたから光圀卿に於ては大いに有がた迷惑に思はれて或日の夕方夜食をお喰りになつて最早お寝みにならうとする際、フト手摺から外の方を御覽になり「ホ、助さん格さん、今日は十五日と見へて中々よい月じやなう、でございますか」「フム、こんな晩には静かな野邊を歩けばよい氣持であらう、何うじやアラ、出かけて見ようか」「ハツ……して何の邊へ……」「されば、何の邊と云ふて別に目途も無い、が此の近傍は大抵見つくしたから一層のこまアラ、是れから出立しようかな」「是れから……」「フム、秋の月もよいが夏の月は又た捨てがたい趣きがある、殊に日中の道中よりも夏は夜の道中は又た格別じや、ソロ、出かけようか」「ハツ……」

三名は餘りの突然に呆れたが一旦云ひ出しては後へ引かね御氣性を知つて居るから強ても止めぬ「して是れより何邊へ御出發でございます、最早お國許へお歸り遊ばされますか」「イヤ、此處まで来た序じや、さてものごころに中國筋を歩いて見ようと思ふ」「へーエ、では是れからお徒歩で御出發……」「元よりのごころ、船では興が無い」「へー……」「それでは一寸亭主を呼んで下され、勘定を拂はふから」「畏まりました」

そこで宿の亭主をお呼びになつて御勘定を濟ませ、殊更ら草鞋もお履きにならず宿屋の下駄をお履きになつたま、ブラリと表へお出ましになられたから薩ながら警固をして居つた下役人などは真逆今頃から御出發立とは氣も付かぬ

「ハ、ア、何處かへ御散步と見へる、御散步なれば別段後をお付け申すには及ぶまい、殊に今頃からお出ましとすればお歸りは間もあるまいから一寸ツボラをかましてやらう」

何分にも交代とは云へ毎日朝から晩まで、晩から翌朝までと云ふ風に絶へず詰めて居るのであるから町奉行から殿しく云ひ付けられてあるとは云ふものゝ偶には少々ツボラもしたくなるのは無理も無い。

下役人の方では少々のツボラと云ふ目算だが光圀卿のほうでは是れこそマルテ鐵條綱を逃れたような氣持「ハ、ハ、ハ、何うやら役人たちは氣も付かぬ様子じや、さアさ此の間に早く行きませう」と云ふような調子で旅籠屋の町を横町に這入るご其まゝスタコラと歩みを急がせ、大阪の町を乾へ乾へと取り、音に名高い淀川も過ぎて早くも尼が崎も過ぎ、西の宮へ來られたのは夜中の八時半時、八時半時と云へば今の午前三時頃である。

○怪しい二人の曲者

光圀卿は御老休とは云へ中々壯健な方であるから一晩ぐらいの夜道は平氣

互ひに冗談半分のお話で僅かにお疲勞を忘れながらダン／＼と歩みをお運びになる。街道の右側にコンモリした森が日に付かれた。

「ホー、何うやら先方は宮さんらしい、兎も角も彼の森で一服しませう」と其森を目あてに先にお立ちになつてお越しになる。目立つた鳥居もあれば立派な門もあるが幸ひに門の扉が明ッ放しになつて居るから夫れを潜つてツゝと社内へお這入りになられた。

「中々立派なお社じやホー、廣田神社と云ふ額が上つて居る、さては有名な西の宮の戎さば此處かな、兎も角參詣をした上何處かで休まふ」「ハ、ツ」光圀卿は神佛共に中々御信心の深い方であるからお供の三名と一緒に社を參拜致され、拜殿の椽側を御覽になつて是れ幸ひと其處に腰をお掛けになり寝ることもなくウツラ／＼とせられて居る。逆か彼方の方に人の來る氣配がある。「ホー、さては何か深き心願の筋あつて參拜せられるものと見へる、切角の

信心を驚かすも氣の毒」と思召され、メツと三名を呼び起し、息を凝してツツと忍ばれて居る。

處が次第に近よつたのは一人と思ひの外、月あかりでツツと透す。何うやら二人らしい、然も社に參詣するしくも無く、是れも拜殿の様に腰を下した。光圀卿等のお休みになつて居る處と反對の彼方であるから一向氣付かぬ様子、二人は腰を下して一服喫みながら小聲で話しを初じめた。

「中々旨く行きましたな」「そりやそうだ、已れが晝からチャーンと用意がしてあつたから當然じや」「全くです、眞逆御主人だつて重助さんの仕事さば知りますまい」「無論のこと、知れたら大變じや」「ハ、ハ、ハ、違ひ無い、さころで早速お顔を拜みたいものですな」「そう急ぐものじや無い何うせ梁棟とニツわけだから」「へ、へ、へ、有り難い、だが何れ程ございます」「フム、小判で耳を揃へて二百兩ある筈じや」「エ、エ、エ、二百兩……その内で半分と

云ふ百兩でございますな」「二百兩の半分は百兩だが夫れが氣に入らんのか
 い」「メッ、滅相も無い、入るも入らんも大入りでございます、へいへい、
 お耻かしい話ですが百兩云ふ纏まつた金を見るのも今日初めてでございます」
 「オイ、如何に聞く人が無いさ云ふた處で棟梁さも云はれる人が情けないこ
 さを云ふものじゃ無い」「です、全くですから……」「まあ全くにもせよ外
 聞の悪い棟梁の顔にも抱はるぜ」「へいへい、さころでこんなことは何うで
 もよいさして例の方を何うか拜ませて頂きます」「ヨシ、夫れでは是れを
 改めるがよい」「ヤッ、何うも有り難ふございます」
 「一人の男は相手の男へ何うやら金子でも渡した様子」「處で棟梁、例のほうは
 頼むぜ」「へい、宜しふございます、併し重助さん今晚私がお店へ忍
 びこんで帳簿の錠前を懐したことは何うか内鑑に願ひます、若し御主人に知
 れては夫れこそ大變でございます、忽ちお出入を止められればなりませんから」

「馬鹿な、誰れがそんなことを云ふものかお前よりも私がたまるものか」「へ
 い、い、それもそうでございますな、でうが明日の朝になりますと大變でこ
 さいませうな何がじゃ」「二百兩云ふ大金を泥棒に盗られたと云へば如何に
 大家の御主人だつて大騒ぎをするに相違はございません」「オイ、つま
 らぬことを云ふものじゃ無い、さ、それではホッ、歸らう、私しだつて愚圖
 くして居るにはいかぬ、早く歸つてソツと寝間の中に這入つて居らねば
 誰れか目を覺しては大變だから」「イヤ、御尤もでございます、併し重助さん
 私しは是れだけ頂戴して有り難ふございますが御主人はお氣の毒でございます
 な、へい、貴郎の前で申すのは悪いかも知れませぬが忠義な番頭さんと思
 ふて居る貴郎が此んなことの發頭人さば……」「オイ、棟梁、餘計なことを云ふ
 ものじゃ無い、世の中に忠義、云ふ人の心は知れんぜ、早い話しが桶正
 哥は何うじや、ヤレ南朝の忠臣ださか我國の忠臣の鑑ださかいろんのことを云

ふが何處に塔婆一本建つてある、それよりも逆臣ださか賊軍の大將ださか、
されて居る足利尊氏の方が餘ッ程豪いわ、私に確かなことは知らんが、尊氏
の墓も木像さやらもお江戸へ行く途中の何んさか云ふ處に立派にあるそうじや
そうすれば褒められて墓婆の一本も無い忠臣よりも蔑されても墓のある尊氏の
ほうが餘ッ程勝しだらう、「ナツ、ナール程、それでは貴郎が死んだら私が
墓を建てあげませう、尤も墓婆なれば木が幾らほごでもございますから尙更
ら御安心なさいませ」
「チヨツ、縁起でも無いことを云ふものじやない、兎も
角も早く歸らう、では棟梁、例の一件を是非頼むぞ」
「へエ、宜しうござい
ますとも、夫れでは私も其處まで御一緒にお供を致しませう」
二人は話しを切つて縁側を離れ又もや門の方へ立ち去らうとするのを、前刻
來委細洩らさず聞て居られた光圀卿は三名に何か相圖をせられると思ふ間も、
くスツク立ち上つて往來の大高聲を振りたて、「曲者待てツ……」と吐鳴ら

れるさ不意に驚いたか彼方の二人、バタ／＼と腰を抜かして其場へ平駄張り、
両手を合して一心に「お助けツ……」
其處へバラ／＼と飛びかゝつた佐々木 渥美、萬五郎の三名は何んの苦も無
く縛りあげた。

○忠臣も何もあつたものじや無い

光圀卿は其様をニコ／＼微笑まれながら御覽になられ、「萬五郎、其方を此方
へ引き連れへ」「畏こまりました」
光圀卿は椽側へ御着座になる、佐々木、渥美の兩士は風体に似合す其左右へ
嚴然と威儀を正して控へる、其前の捨石の傍まで慄へて居る兩人を萬五郎は無
理矢理に引つ張つて來た、光圀卿は其様を月明りで御覽になり「コレ／＼兩名
の面表を上げへ」「へツ、何うぞお助けた願ひますぞ」「フム、仔儀によら

ば助けぬでも無い、が前刻來彼れにて聞き居れば重助とやら申す者、棟梁とやらと腹を合せ何うやら主家の大金を盗み出したる趣き、確と夫れに相違はあるまい」「へッ、イエ、その……」「イヤ、最早云ひ譯には乃ばぬ、が兎もあれ重助とやら其方の主人とやらは何方の何んと申すものじや」「ドツ、何うか夫れだけは御免を蒙りまする」「ボー、許せとあれば強ては尋ねぬ、其代り夜が明ければ此ま、代官所へ引きたてるから夫れでよからう」「ドツ、何うか、夫れだけは眞ツ平……」「ハ、ハ、ハ、ハ、夫れでは主人の名を申せ、又た棟梁とやらは何うやら其家へ出入りの大工とも見受けるが、出入の旦那、へ泥棒に這入るなぞは怪しからぬ奴」「へエ、ベツ、別に私しは此んなことをしたく無いのでございますがツイその……重助さんから頼まれてまして……」「誰れから頼まれた處で旦那先へ忍び込むとは第一間違つて居るじや無いか」「イエその何んでございます、別に忍び込んだと云ふ譯ではございません」「フム、

それでは一体何うしたんじや」「へエ、實は何んでございます、此の重助さんさんが今晩頼みがあるからツツと来いと申しますものでございます」「参ります、表の大戸をその……家尻を切れと申しますので仕方ございません、少々切りました、するさ今度は帳箱の錠前を壊せと申しますのでツイその……悪いこと、知りながら夫れも云はれる通りに致しましたようなわけで……」「フム、それで其家と云ふのは全体何處じや」「そッ、それはその……」「コレ、お前も隠すさよく無いぞ」「へエ、そッ、それでは申しますが實は此の少し先方のほうに伊丹屋さんと云ふ造酒屋がございしますが其處のお店でございします」「左様か、ヨシ、さころで重助とやら、前刻其方は正成公の警を致して居つたが怪しからぬ心得ちがひであるぞ」「ドツ、何うも恐れ入りまするが」「夫れに付けて尋ねるが正成公は兵庫の湊川にて討死せられたと聞き及ぶ、兵庫と云へば此處より程遠からぬ筈、其方も大抵は存じ居るであらうが、湊川には

正成公を祀つたところは無いと云ふか」「へッ、まッ、まつたくございませ
 ん」「フォーム、それは怪しからぬ……が其儀は其方の知つたことでは無い、兎
 も角も大恩を受けし主家に冠を致すとは獅子身中の虫じや、其方如き者は一般
 の見せしめとして此場で重き仕置に致すべき筈、社内を血汐にて汚すは恐れ多
 し、是れより主人に引き渡すにより如何ようも成敗を受けへ」「まッ、全く
 私しが一時の心得違ひにございます、ドッ、何うか此度は特別のお慈悲をもち
 まして」「イヤ、其儀は主人に願ふがよからう特別の詮議を以て代官所だ
 けは許してやる……コレ、萬五郎」「へエ」「お前大儀ではあるが此者、兩
 名を伊丹屋とやらへ引き連れるがよい」「畏まりました」「若も主人が寢んで
 居るようなれば目を覺させて是非とも主人に引き渡せ、若しお前の名前を聞く
 ようなことがあつても決して乃公のことを云ふのではないぞ」「畏まりました
 」「夫れまでは此處で待つて居る、若し此の兩名は途中で動かぬようなことがあ

れば尻でも力任せに叩いてやるがよい」「宜しふございます……さアコン畜
 生、早く歩かれへか、御隠居様がお待ちかねだ何故愚圖くする、コリヤ糞ッ
 「イツ、痛ッ、痛ッ……」
 萬五郎は足の進まぬ兩人の尻を力まかせに打ちながら一足歩いては立ち止ま
 り二足歩いては後を怨めしそに見返るのを急ぎたて、門を外へ出て行つた
 光圀卿には其後を見送つて「なア助さん格さん何うも怪しからぬ事を聞たな
 「ハッ……」「他の武將なれば兎も角、我國で昔から忠臣の鑑さも謠はれて居
 る楠公の墓どころか塔婆一本すら建てた處が無いとは誠に不都合じや、如何に
 境季とは云へ忠臣孝子の後だけは是非さも町重に用はねばならぬ筈であるに是
 れは怪しからぬ手落である、そんなことをするから次第に忠臣も廢り今のよう
 な不心得者の出来る道理、是れば重助とやらばかりも責めるわけにもゆくまい
 世間が殊更らにダン、罪人を榨へるようなものである」と云ふことから武士

の心得こころねもなるべきこと、忠臣烈婦ちゆうしんれつぽのこゝについているくさお話をせられて居るころへ漸やうや萬五郎まんごろうは立ち歸かへつた。

「やア何どうも御隠居ごいんきよ様大變おほまへんに遅おそくなりました」
「オ、御苦勞ごくらうがあつた、何どうじや主人しゆじんが起きたかナ」
「へエ、只今ただいま参りますと先方むかふでは泥棒どろぼうが這入はいつたさ云いふので上下うへしたに引ひつくり返かへつて大騒おほさわきをやつて居る處ところでございました」
「ハ、い、それから何どうした」
「へエ、兩人ふたりの奴やつを縛しばつたまゝ渡わしますと主人しゆじんは大變おほまへんな悦よろこびでいろく私わたしに尋たづねますから二人ふたりを渡わたしたまゝ駈かけて戻もりました

「ヤッ結構けつこうく、それでよい、それでは定さだめて誰たれか此處こゝへ尋たづねてこつが逢あはば面倒めんどうじや、さアく見付み付つからぬ内うちに早はやく行ゆきませう」

禮れいを云いはれるのめい面倒めんどうさ云いふので丸まるで泥棒どろぼうが逃にげるように附邊あたりを見廻みまはし隠かくれるように忍しのびやかに其處そこを御出立ごしゅつたつになり、御影みかげへお着つきになつた頃ころに漸やうく夜よがあけた。

「此處こゝは酒さけで名高なだかい灘五卿なだごうの内うちさか聞きて居る、助すけさん何どうじや本家本元ほんけほんもとの酒さけを一杯飲はいのまふかな」
「恐れ入おそります」
「何も恐れ入おそるにも及およばぬ、何處どこか休やすむ處ところがあれば少し身体からだを憩やすめながら一杯飲はいのみませう」
「ハッ、併しかしまだ時刻じこくが早はやふございますから定さだめて何處どこにも用意よういはございますまい」
「イヤ、誰たれしも夏なつの旅たびは出立しゅつたつが早はやいから茶店ちやみせもモ一で出て居るであらう」
「でございませうか」

彼方あなた此方あなたを御覽ごらんになから歩あゆまれるさ漸やうく家の外はつれに立場茶屋たてばちやさもつかず飯屋いしやさもつかぬようない軒けんの家いえが見付みつたから兎とも角かくも其家そのへお這入はいりになつて朝飯あさひんがてら一酌しやくをお傾かたむけになり、汚よいながらも一間いまを惜ありさコロリと横よこになられ暫しばらく疲勞つかれを休やすまれた上うへまたもや御出發ごしゅつぱつになられた。

○一寸聞ちよつときたいことがある

それからダン／＼歩を運ばれる内、兵庫はお着きになられたのは其日の夕刻であつた、尤も御影でお休みになり、夫れから途中でも彼方此方の風景やら名勝などをブラ／＼御覽になられたから何うしても道は抄取らぬ。

ところで云ふてをくが兵庫と云ふた處で現今のように家も建ち並んで無ければ神戸などは田舎も田舎、漁師の家がバラ／＼と振りかけたほごしか無かつたのである、其内でも兵庫は中國、街道筋の宿場と云ふので多少は家も並んで居つた。

光圀卿の御一行は此處へおかゝりになつてフト御覽になると行く手に油煙で眞つ黒ふなつた行燈へ「菊水屋」と記した旅籠屋がある、將も旅籠屋と云へば一寸体裁はよいが入口にはガタ／＼の障子をほめた陋くしろい何う見ても木賃宿と云ふような体裁。

なア助さん、何うせ此地で泊らねばならぬのであるから彼方の菊水屋へ泊ら

うか」「ハツ……」と助三郎は云ふては居るが萬五郎は氣が進まぬか顔を擧めながら「モシ御隠居様、お宿なればモツト氣のきいた處になすつちや何うでございます、何が何んでも彼方じやアンマリでございますが……」「ハ、ハ、ハ、ハ、成程見た處は陋くろしいが眞逆夜具なしに寝ろさは云ふまい、野宿するよりは勝であらう」「御冗談を仰言つちや不可ません、宿屋に夜具なしで客を寢させ處がございませぬものか」「さ、それじやから先方へ泊らうと云ふのじや、第一菊水屋と云ふ名が氣に入つた」「阿呆らしい、名前に惚れて見す／＼陋くろしい處へ泊る人もございませぬ、彼んなところだつて旅籠賃は同じほご取りませぬ」「そんなことは何うでもよい、兎も角彼方は氣に入つたから彼方に定めよう」

萬五郎は何れほご不賛成を唱へたところで肝腎の光圀卿が氣に入つたと云はれ、仕方が無い、いよいよ其菊水屋へお泊りになることゝなつた。

顔も手も眞ッ黒くなつた女中の案内によつて一間へお通りになる「ところで女中さんお湯は沸いて居りますか」「ハイ、お湯は私の方にはございませぬが此家から少し西の方にお湯屋がありますさかい其處へお越しなさいませ、何うもモ一沸いでございませうから……」「ヤレレ、夫れは大儀じや、がまア仕方が無い、お前さんだちも一緒に行かふ」と三名をお連れになつて風呂屋へお越しになり、ヤツと汗を流して御歸宿になる。

女中はお歸りの顔を見て夕食の膳を運ぶ「何うかお喰んなさいませ」「ハイ、併し御飯だけでは何んも無く物淋しいから一寸一杯つけて下さらんか」「宜しふございます」と下女は彼方へ立ち去らうとするのを呼びよめになつて幾らかの金子を紙にお捻りになり「是れは少しだが茶代に取つて置いて下され」とお渡しになられた。

天下の副將軍たる光圀卿も大分に旅馴たから中々に如才がない、今でも初め

ての旅籠屋へ泊れば同じ興へる茶代なれば先に出すと後で出すとは大變な待遇ひが違ふものであるが光圀卿には此の呼吸をよく覺られたと見へる。

女中は禮を述べて立ち去ると稍あつて銚子を持つて来た、光圀卿には夫れをお取りになつて三名をお相手に膳の端でチビリ／＼と召しあがつて居られる、其内に早くも銚子は軽くなつた。

「御面倒ですがモ一本持つて来て下され」「宜しふございます」「夫れから御亭主が居れば一寸呼んで下さらんか」「ハイ……」

女中は立ち去ると間も無く亭主はオツ／＼しながらやつて来て敷居際で叮嚀に挨拶をする「何うもお客様、毎度御愛顧に有り難ふ存じます、又た只今は澤山なお茶代を頂きまして早速お禮を申し上げようぞ存じましたが御飯中にお邪魔を致しましてはぞ存じましてツイ差し控へましたなうのことで、へー、何うか悪からず……」「イヤ／＼そんなことは態々お禮には及びませぬ、實はな

少々お尋ねをしたいことがございますからさア此方へ這入つて下され」「へエ何うも恐れ入ります、何か御用なれば是れで伺ひますが……」「そこでは少々都合が悪い、さ、遠慮は要りません此方へ這入つて下され」「へエ、では御免を蒙ります」

訝かしげに亭主の進み寄るのを待つて「何ふじや御亭主一杯飲みなさらんか」「へエ、有り難ふございますか私しは一向不調法でございますので御酒だけは御免を蒙ります」「左様か、それでは仕方が無い、時に御亭主、お前さんの家は菊水屋と云ふ家號を付けて居りますが是れには何か譯がございますか」「へエ、それや無論でございますも……」「ホ、ホ、では其譯を一寸聞かして下され、何うも餘り珍らしい家號ですから夫れを聞きたいと思ふて態々お呼びましたが」「そりやそうでございます、まア菊水に縁のあるのは此處と河内よりございますまい」「ホ、ホ、それは又た何うして」「ではお客さん

はお見受け申しますればお年も随分召していられますが何んにも御存じありませんな」「左様かな」「第一此處を何處とお思ひになつて居ります」「ハ、ハ、ハ、是れは又た變つたお尋れじや、此地は云ふまでも無い攝津の國の兵庫でございますいませんか」「さ、それは判つて居りますが、此の兵庫には菊水の紋が離れられぬ關係がございますぜ」「ホ、ホ、左様かな」「昔し楠正成さま云ふ忠義な豪い犬將があつたのを御存じでございます、楠正成さま云へば小供でも知つて居る筈ですから」「ハイ、それは私も小供の内から知つて居ります」「さ、其正成さま云ふ豪い犬將の御紋は菊水でございます、ですから如何な悪い奴も其菊水の御紋ある旗印を見ましたら何れも是れも、チリ、チリになつて逃げたそうでございます」「ハ、ハ、ハ、それではお前さんのほうも悪い奴を寄せ付けぬように菊水屋と云ふ家號をお付けになつたさ云ふのですな」「ナ、ナ、そんなことはありません、其正成さま云ふ犬將は是れから少し先方

の湊川と云ふ處がございます、其處で悪い奴と戦をしたのでございます、ところが夫れほど豪い大將でも御運の末でございました、トローく討死をなさつたのです」「成ほど……」「其御最期を遂げたお寺は廣嚴寺と申しまして今に残つてございますが、夫れほど忠義な夫れほど豪い大將でございましてに御最後を遂げてから此方墓らしいお墓も無ければ線香一本あげる人もございませぬ貴君方にこんなことを申しましたところでお判りになりますまいが今時のお大名なぞ云つた處で忠義も何も御存じ無いようでございませぬ」「眞逆そんなことはありませぬ、お大名と云へば一國の上に立たねばならぬ方でございますから第一番に忠義の鑑を下々に示してやられねばならぬ筈ではございませぬか」「さア誰れしもそう思ふのは御尤もでございますが、處が全く反對でございませぬ」「夫れは怪しからんございませぬが夫れについて何が證據がございませぬかナ」

光圀卿はニコく微笑まれながらお手にした緒口をクツミ飲み干し一膝進まされた。

○お咎めは受けても本望

亭主は相手は眞逆天下の副將軍とも知らぬから乗地になつてメロく不平を洩らす。

「へエ〜ございませぬ、實は私しは斯ふ見へまして大の正成様愛顧でございます」「ホー……」「第一正成様と云ふ大將はお天子様をお助けして悪い奴等を討ち亡ぼそうさいる〜の謀略で散々の目に合しました、悪い奴等は何日も〜酷い目に合されるものですから今度は澤山な軍勢で押し寄せて來ましたのでたまりませぬ、トローく湊川で敗られて廣嚴寺様の客殿で切腹したのやそうで……へエ〜是れは廣嚴寺の和尚様のお話でございます」

「成程、それからお大名は忠義を御存じ無いと云ふ證據は……」
 「さ、夫れは是れからのお話でございます、エーその……正成様は日本でも一と云ふて二と下らの忠義なお方であつたさ云ふお話しでございますから、是れまで私の方の家號は播摩屋と申しましたのを和尚様のお話しを聞いて菊水屋に改めました、それから私共が發起になつて正成様のお墓を立派なものに致したいさ云ふのでいろく寄合を致して居ります内、此地のお代官様の耳へ這入りましたのでございます」
 「ホ、夫れは奇特なことじゃ、夫れではお代官も定めてお悦びになつたであらう」
 「ところが何うして、素町人の分際にて生急氣なことをする、左様の儀は凡て殿様のお考へにあることだから決して相成らぬと大層なお叱りを蒙りました」
 「お叱り、それは怪しからぬ、そんなことは下々から云ふ迄も無く上でも悦んで何んさかせればならぬ筈ではございませぬか」
 「尤もお代官も最初は何んにも仰言らなだったのでございます、夫れ

がいよくさなつて何うしたことが急に八釜しく言ひ出しましたのでございませぬ」
 「フーム、それは何うも可訝しい、夫れでは其間に何が譯があるのぞありませう」
 「へエ、お代官のお言葉では自分には何も云ふつもりでは無いが殿様が此のことはお聞きになつて町人の癖に差出がましいことをするさ大變な御立腹であつたさ云ふことでございます、それで廣敷寺の和尚様からいろくお話しを願ひましたが少しもお取りあげはございませぬ」
 「左様か、それは残念なことでございますな、が併し御亭主、私しも聞かぬ内は兎も角、そんなことを聞いた上は是非さも建て見たいと思ひますが……」
 「阿呆らしい、そんなことが出来ずものか」
 「イヤ、出来ぬものなしたいのには私しの病ひでございませぬ、邪が非でもやつて見せませぬ」
 「お代官がお許しの無いところへ第一お金かチツトやそツとで出来ませぬぞ」
 亭主は光圀卿のお言葉をテんで相手にもならず只だ先のことを思ひ出してか

代官の處置をのみアツ！、ぼやいて居る。

「冗談は冗談にしまして、殿様なりお代官のお心は判りませんな、セメテ墓らしい墓も建てますれば正成様も草葉の蔭でお浮びになりませうし又た諸國から参りにくる人もございまして自然土地の繁昌になりますのになア」「ハ、ハ、ハ、如何にも其通り、だから私は是非とも建て、見ようと思ひます、尤もお金も少々は要りませうが是れば皆様の御心配にならずとも私しの旅費の内から出ませう、兎も角御亭主、何處かに相當な石屋さんがございませうまいか」「そりやございませうが少々のお金では出来ませんぜ」「左様か、自体何れほざあればよろしい」「左様でございませう、私し共等の見積りましたのはチャンと据へ付けをしまして悉皆五兩でございませう、其代り随分立派なお墓でございませう、へエ、一人前二分づゝ十人に割り付けましたのでございませう、豪い大將のお墓でございませうで見すばらしいものは建くられませんから……」

「成程、如何にもお話しのお通り同じござなれば立派に建れば何日までも残るものでございませうからな、やツ宜しい五兩が十兩でも私し一人で建てませう」「エツ、十兩でも……」「左様、十兩は扱てをき乗りかゝつた船じや二十兩三十兩でも出ませう」「へー……」
素晴らしい光圀卿の鼻息に亭主は呆れて居るさ、光圀卿には更らに言葉をついで。

「ハ、ハ、ハ、此んな風体をして居りますから疑ふのも無理はございません、實は御亭主、私しは是れから宮島や周防の錦帯橋を初め讃岐の琴平までへ見物に行くつもりで旅費は少々持つて居りますから其見物さへ止めませうれば十兩や二十兩は何うにもなります、それから夫れでも足りません時には大阪に親類もありませんよ、併しお代官のほうは第一に困りますぜ」「ナ、ナ、それだつて建て、仕舞へば

夫れまででございます、万一お咎めを受けたところで忠義の鑑と唱はれた楠公のお墓の爲めと思へば少しも苦はございません、それで私しの身体が亡くなるようならば一生の死晴でございませう、ハイハイ」

光圀卿のお言葉に亭主は目をむきながらお供の三名の顔を眺めてキョトクとして居る。

「處で御亭主何うでせう其石屋さんさ云ふのを一寸此處へ呼んで貰へますまいか」「へッ、そッ、それでは眞實でございませうか」「元よりのこと、私しは偽を云ふのは嫌い、又た昔しから思ひ立つたことは是非さも仕遂れば氣のすまぬ性分でございます、併し同じ石屋さんと呼ぶに似たところで此地に腕のシツカリしたのはありませんか」「へエ、そりや何んぼ出舎でございましても夫れだけは自慢が出来ます、御承知の通り御影石は此處から船に積んで諸國へ出しますから腕のある石屋は此地はご揃ふところは外にはございませうまい」

「左様か、それなれば尙更ら結構、では少々お金は高くついてもよろしい、何うか此の土地で一番立派な石屋を呼んで下され」「そりや呼びますが今のお話しは眞實ですな」「そんな心配は要りません、兎も角も其石屋さんを一寸呼んで下され」

強ての言葉に亭主も半信半疑の内に其場を立ち去つた。

○お前さんたちの性には合はぬ

亭主は立ち去つた後、稍あつて又もや光圀卿のお部屋へ這入つた來た。

「お客様、只今石屋を呼びにやりました處が何うしても参りません」「ホ、それでは留守でございしたか」「ナイヤ、宅に居りました」「そりや、何分にも少々變屈な男でございませうか……何うでございませう仕事は少々下手ではございませうが外の者呼びにやりませうか」「變屈で來ん

……そりや面白い、留守さか病氣さかで來られぬのなれば仕方は無いが變風で來んさ云ふのなれば私しも意地から其人に頼みたい、一体變風さは何う云ふ變風でございますな」「へエ、大体其男は人様に頭を下げるのは嫌いでございませう」「そりや誰れたつて好き好んで頭を下げるものはありません」「そりやそうでございませうが、商賣さなれば頭も下げればなりません又たお辨茶羅も云はればなりますまい、そこが彼奴は已れば仕事をして遣るのじやから何も頭を下げることもよい、夫れが嫌なれば此方も仕事をしてやらぬまでじやと申す風でございませう」「ホー、そりやいよく面白い男じや、だが御亭主、私しは別に頭を下げてくれいさば云ひませぬぜ、仕事さへして貰へばよいのですが夫れでも参りませんか」「へエ、そころが只今使ひを遣りますと、何うせ石も見れば話の極る筈も無いのじやから此方から態々行つたところて話の極らぬのは判つて居る、それより用事があれば明日でも此方へ出掛けて來るよう云ふてく

れと斯様に申しますので」「ハ、ハ、ハ、如何にも其通りじや、それでは明日私しから出掛ませう、それについて私しも少し考へがありますから」
と云ふので其晩は夜食を濟しになつてお寢みになり、さて其翌朝になるさ先づ正成が最後を遂げたさ云ふ廣嚴寺へお越しになつて御覽になるさ如何にも宿の亭主が話の通り墓さ云ふのは形ばかりで雑草の生へ茂つた中に土饅頭のような小さい石がホンの印しだけに置いてあるだけ、一本の墓婆すら建てられて無い。
「其昔、南朝の忠臣として帝の爲め大敵を討ち憐れなされた楠公も死してのち、千載までも武道の鑑たるべまに其御墓は此の始末さば誠に淺猿しき仔儀、町人どもより云ふ迄も無く一國の國主たるべき者が速かに何んさは致さずばならぬ筈を今まで捨てなくさは論外のことである、其方等兎もあれ此の附近を一掃除して下され」と仰せられて附近に覆いかゝつた雑草をお供の三名に取り

拂はせ、先づ御白身忝やしく禮拜を遂げ、次で三名にも拜ました。
 「なア助さん、忠臣も亡びての後は此の通りさあれば下々では善き事を見慣はぬのも無理も無い、是れは寸時も此のまゝでは捨てなけまい」「御意にござりまする」「夫れにしても如何に上の威光さは云へ奇特の人々が建立しようとするのを差し止めるさは以の外のこゝでは無いが、此處は確か櫻井豊前守の領分と思ふが豊前守は夫れくらのこゝを知らぬ筈はあるまい」「察しまする處櫻井殿には御建立あるべき筈を下々のものより先んぜられたさあつては諸國の聞へも如何ぞ存じ一時差し止められたこゝも心得まするが……」「それにしても宿の亭主等の申し出たのは昨日今日のこゝでは無い様子、さすれば遅くも今ころまでに何んさかせねばならぬ筈、それに見る處雜草は心のまゝで生ひ茂り見る蔭も無き荒れ方、又た此寺の和尚さても少しは手入をすべきに是れ又た打ち捨てなくさば以ての外のこゝである、斯様の處へ新たに建立をするさて

も數年ならぬ内には又た如何ように荒れはてるかも知れまいのを」「御意にござりまする」「フム、此上は別に適當の地所を撰ばすばなるまい」
 當に皇室の御爲めに盡し奉つり且つは世の忠臣孝子を讃へようさせられる意志を持たれてゐるだけ正成の墓の荒れたのを見ては非常に御憤りになられたのも無理は無い、早速其處から菊水屋へお引つ返しになり亭玉にお尋ねになつて當地第一の石屋と云ふのへ向はれた。
 見ると三間間口くらいの家で店は床をかゝす其處に六十餘りの老人と三十には足らぬ程の若者は各自に御影石を控へてコツ／＼仕事をして居る。
 「ホー！此處かな」とニコ／＼微笑みながらヌツとお這入りになり「ハイ、御免なされや」さお聲をかけられると老人はチラリと見たまゝ仕事の手も止めるらしく無い「何か用かい」「さア、外でも無いが少し頼みたいものがあつて來ましたのじや」「そうか、物によつては仕てやらんでも無いが石塔でも拵へく

れいさ云ふのであらう」「左様く、一つ立派な石塔と思ふのですが石を先づ見せて下され」「ナニ立派な石塔……オイく、見ればお前さんはお百姓らしいが石塔には立派なものには要らぬものじや、多分お前さんの連れ合ひが亡くなつたので其石塔だらうが身分相應のにするがよいぜ」「せ心付けは有り難いが兎も角も石を一遍見せて貰ひたい」「お前さんなぞが石を見た處で判るものがまアく其處あたりに置いてあるのを見るがよい」「左様か……」

光圀卿は別段意にも觸へた様子も無く店先きを御覽になるさいるく石をズラリと並べてある内、表の入口に高さ四尺ばかりもあらうと思はれる立派な和泉石にお目ごまつた。

「是れは丁度よきさそうじや、モシ是れは何れほどでございます」「オイく、馬鹿なことを云ふものじや無い、そんなものお前さんだちが石塔にして何うする、勿体ないことを云ふまい」「天れでは是れは賣物じや無いのですか」「買

手があれば賣るがお前さんだちの性には合はぬ、百姓衆は石と云へば只のよう
に思つて居るが中々安く出来るものじや無いぜ、第一夫れくらいのもを此處
まで持つてくるだけでもチツトヤツツトの費用じや無いからな」「左様か、併
し何れほど高いと云ふた處で五十兩も百兩もするものじやございませうまい」
「ナニツ……」「高々五兩か十兩あればチャーンと字も入れてくれるでせう」
「オイく、お前は巳の家へ何をしに來たのじや、狂人なれば氣狂ひらしくす
るがよい、オイ側について居る若い衆、お前さんだちは何さか嫌して彼方へ連
れて行つてくれ巳の方はそんなものに相手になつて居る間が無いから」
餘り高飛車に出たので石屋の老爺は光圀卿を狂人と間違つたらしい。

○常陸から兵庫まで逃へに來た

夫れでも光圀卿には少しもお怒りになる模様も無く「イヤく私しは狂人で

も何んでま無い、兎も角其石は氣に入りましたから是非に買ひませう」「阿呆らしい、お前さんたちの石塔なれば高々二歩もあれば頂上じや」「ですが賣物なればお金さへ拂へばよいでせう」「勿論買ふと云ふのなれば賣るが高いのは承知か」「高い／＼と云はれるが一体何れほします」「そうじや、臺石は別で彼れだけへ戒名を入れて……そうだなア……フム五兩に負けてやらう」「五兩……それは安い……それから臺石はブーツと途切つたものにしたいが何うですな、お前さんのほうに有りますか」「エツ、オイ眞實に買ふのかい」「眞實も偽も無い、若し疑ふようなればお金を拂つてをいても宜しい」「コレ／＼助さん」「ハイ……」「一寸石屋さんへ五兩拂つて下され」「畏こまりました」「三郎はお預かりしてある財布の中から小判をバラ／＼と掴み出して其内五兩を石屋の仕事して居る御影石の上へザラ／＼と置いた」「さ、石屋さん、それでは御隠居さんの仰言る通り五兩あげますから調べて納めて下され」「ゲエツ

五兩……それでは眞實にお買ひ下さるのですか」「呆れて光圀卿の顔を眺めても此方は一向平氣な御様子」「元よりのこと、處で臺石のほうもお金は何れほごかつても宜しいから立派な石はありますまいか」「そツ、それでは二三日待つて下れさば相當なのを探し出しますが、それにしても戒名は一体何んぞ彫りますので」「フム、夫れは私しが書いて持つてきましたから何うか念を入れて彫つて貰ひたい」「エツ、お前さんが……」「フム何うか此の通り彫つて貰ひたい」「懐中からお取り出しになつて渡すのを石屋は手に取つて見るさ筆の跡も見事に「呼鳴忠臣相氏之墓」の八文字、暫らくは光圀卿と其下書を七分三分に睨み比べをして居る。」「是れはお前さんが書いたのかい」「左様です何うかしましたかな」「イヤ何うもこうもないが申々立派に出来てなる、乃公も長いこといろ／＼の字を彫

つたが是れくらいのは初めてだ」「左様かな」「處で六かしい戒名だが是れは何んぞ讀むんだ……何……何……忠……何……オイ……是れは戒名じや無いな」「フム、戒名では無いがア戒名みたようなものです」「フーン、是れは矢張りお前さんの連れ合ひの婆さんかい」「イヤ違ひます、が兎も角も其通り影つてくれればよろしい」「そうか、それでは彫つてやる、併し出来たら何處へ持つて行けばよい」「それは今日明日の内に定める筈ですが何日ころまで出来ますな」「そうだなア、彼れくらいのものであれば磨きも充分に入れればならず、字だつて折角是れくらいに骨を折つて書いてあるとすると是れも念を入れればならぬから早ふて二十日、遅くなればア一月かな」「左様か、それでは私しも大抵夫れまでは此少し先方の菊水屋に泊つて居りますから常陸の光右衛門さ知らしてくればよろしい」「エツ、お前さんの國は常陸……オイ……常陸から兵庫まで態々石塔を誂へにくるものがあるものかですが」「此地には

立派な石のあること、殊にお前さんは中々立派な腕だと聞たから態々來ましたのじや」「エツ、あの乃公のことが常陸まで聞へてをるか」「そりや聞へて居りますことも兵庫の石屋の兵助さ云ふ人は腕にかけては日本一ださ云ふ評判ですから眞實か、そりや有り難い、それでは今度の仕方は力一杯にやつて見せるぞ」「フム、何うか頼みます、處で臺石も相當なのがあれば是れも菊水屋まで知らして下され」「宜しい、確かに引き受けた、オイ婆さん、一寸お茶を入れな、何を愚圖くして居るんだ、早く入れんかお客さんは三人さんじやよ」「誰れしも自分のことを褒められて悦ばんものは無いが其内にも石屋の兵助は少々變り者だけに氣に入られば何んな人が來ても鼻先で遇らふが自分の名を聞き傳へて遙々遠國から石塔さ云ふような類の少ない誂へものに來たさ考へたから大變な悦び、今までの佛頂面は忽ちホクくものさなつた。さて光右衛門の御一行は御注文の上でお歸りになられるさ其後で例の下書を手

に取つて見るさ、記した意味は判らぬが書体だけは澤山に見付けて居るから其立派な書き振くらいは判る、そこで是れをば自慢半分、表から真正面の處へ甲して石拵への出来るまで麗々しく飾つた。
するさ或日のこさ其處を通りかゝつてフト是れに目を付けたのは土地の代官でつた、代官も最初は何氣無しに目をつけたのであるがヨク／＼氣を付けるさ例の八文字であるからツカ／＼兵助の宅へ這入つて其譯を聞くさ、常陸の人の注文であるから出来あがつたなれば多分國許へ持つて歸るのであらうさ云ふことであつたが、其人の宿は先に楠公の墓を新らしく建てようさ企てた菊水屋であるさ聞たから聊か疑ふ處は無いでも無い、殊に楠公さは何等の關係も無い常陸の國へこんなものも建てるも可訝しければ又た建てるにした處で殊更ら此んな遠方から重くろしい石を持つて歸らすさも自分の國で拵へれば出来ぬこさは無い筈さ是れも怪訝しく考へた。

さ云ふ此地へ建てるさ云ふのなれば自分の威光で差し止められぬこさは無いけれど領分以外、然も遠いも遠い常陸邊のこさまで、如何に代官だからさて贅を入れる譯にはゆかね、それで兵助のほうで委しい話しを聞て其足で直様菊水屋へ向ふた。

○貴郎もよつぽご剛情な

光圀卿のほうでは代官が夫れを差し止めるさ云ふこさも腑に落ちねば又た兵助の方で委しい話しを代官にしたさも御存じ無いから今にも臺石の知らせがあるだらうさお待ちかねになつて居られるさ亭主はケタマシクも飛び込んで来た。

「モシお客様大變でございます」 「ホー、御亭主、何事が出来ましたかな」
そんな平氣なこさを仰言ていては大變でございます」 「ハ、ハ、ハ、左様が

「何う致しましたな」「へエ、その……参りましたので……」「ホー、誰かが参りました」「さ、貴郎方は滅法大膽のこゝろを成さつたそうでございますな」「滅法大膽さは何んでございます」「外でもございませぬ、私しが此程おこめをした正成様のお墓をト……お誂へになつたそうでございますな」「ハイ、彼れなれば如何にも誂らへました、それが何うしましたのです」「さ、その爲めに只今お代官がお出になりましたが、今は何處かへ出て留守ださ云ひましたせ」「留守……誰れがです」「誰れがじやありません、貴郎方のことでございます」「私達……私達は此處に居るではありませんか」「けれども居るさ云ふて御覽なさい、何んなお叱りを受けるかも知れませぬから……」「ハ、ハ、ハ、それなれば少しも構ひませぬ、私しはお代官に逢ふて其話を致しますから何んなれば一寸使をやつて下さつても宜しい」「そつ、そんなことをすれば只では濟みませぬ」「イヤ、其心配は無用、又たお前さんの方へも

決して御迷惑はかけませぬから安心するが宜しい」「そりや當然でございます、私しの方へお咎めの筋はある筈はございませぬ」「ですから心配無しに代官が来たなれば此處へ通して下され」「貴郎も餘ッ程剛情な人ですなア、夫れでは今度お代官が見へたならば正直に云ひますが、泣面をかいても其時は知りませぬ」「ハイ、夫れは充分承知をして居ります」「チヨツ、何んだつて剛情な人だらう」「亭主は手持無沙汰にアツ、云ひながら立ち去るさ光隨卿は例の御氣性だからッさはして居られぬ、料紙をお取り出しになつて何事かスラ……お認めになられた萬十郎、其方大儀であるが一寸走つて行つて貰ひたい」「へッ、何方へ……」「外では無い、代官の邸は多分此の近くであらうと思ふから是れを拵つて行くよう」「畏、こまりました、如何ように申しまして宜しうございませぬ」「別に何事も云はずともよい、取次の者に渡せば直ぐに引ッ返してくるよう」

「畏こまりました」

光圀卿のお言葉によつて萬五郎共まゝ駈け出して代官の邸へ向つた。

代官は石屋兵助の家を出て菊水屋へ立ち寄り、常陸の光右衛門と云ふのを尋ねたが折柄不在と云ふので一先づ自分の邸へブラ／＼と引きあげると支關に出迎へた一人の侍ひ其顔を見ると待ちかねたように云ふ。

「お歸り早々ながら申し上げます、只今意外なる御方より御使ひがござりました」
「ナニ、意外なる御方よりとは……」
「ハツ、兎もあれ是れなる御書面の御覽の程を」
「フム……」

恭しげに差し出す書面を代官は支關の敷臺に立つたまゝ手に取つて見る。表には「當所の代官へ」と記し裏には「光圀」と小さく認ためてある、是れを打ち返し、不思議そうに考へてをたが俄かに思ひ當つたか其場にベタリ座つて目八分に差しあげ、恐る／＼封を押し披く。

光圀

當所代官へ

聊か談じたき儀有之により此書接手の上は直ちに菊水屋まで來るべきもの也

さあるから代官は大に驚いて「ハ、ハツ……」と、一旦は其場へ平伏したまゝ暫らくは頭も上げるこさすら出來なんだが稍あつて「此の御書面は如何なる御人が持ち越された、定めて水府公の御家來と思ふが」「ハツ、其儀は聊か不審に心得居りまする」「何んとして」「何うも百姓体のように見受ましてござりまする」「ナニ、百姓体……」「御意にござりまする」「フム、如何さま夫れは可訝しい、水府の御老公ともあるべき御人を百姓が使ひとして差し越すべき筈は無い、殊に御老公當地へ御越しとあれば尼が崎の御城内より何分の御沙汰もある筈、そのみならず他に相當の御旅宿もあるべきに殊更ら陋ろしき菊水

屋の如きを撲ぶも不審の至り……それにつけ思ひ合すは本日石屋兵助方にて認めたる楠正成の石碑の下書……はてな……」

代官は夫れから夫れへと考へてハツタと膝を打ち「フム、察する處是れも菊水屋の亭主の細工と覺へた、曩に楠公の墓を建立するこの計畫も此方聊か意に免たぬことありし爲め差し止めたが、夫れにつけも尙も懲りずまに又もや何者かに水府御老公の御名を騙らせ此方を頭より挫がん存念と心得る、已れ悪きも悪き奴、此上は此方にも所存ある、それツ是れより菊水屋に乗り込み、菊水屋に乗り込み、菊水屋の亭主を初め水府御老公と名乗る徒者を早々に召し捕る手順を致せ」「畏りました」

代官は云ひ捨てたま、御書面を驚擲みさして其ま、奥へ還つた。

○大變なことが出来ました

光圀卿のほうではそんなことは御存じ無いが、楠公の石碑御建立について一應は當地の領主の耳へ入れてなれば不都合であると思召されたので萬五郎が代官の邸から歸つてくるのを待つて又もや一通の御書面を持たせ、尼ヶ崎の城主櫻井豊前守の家老久松玄蕃の手許まで急いで遣はされた。

兵庫から尼ヶ崎まではザツと五里餘りはあるけれども萬五郎は以前道中稼ぎをして居つたから五里や十里の道は少しも苦にはならぬ、光圀卿のお言葉によつて道を急ぎ一時半、今の時間で三時間ばかりで漸く玄蕃の邸へ着いた、そこで御書面を取次ぎの侍ひに渡す、侍ひは又た玄蕃に取り次ぐ、玄蕃は手に取つて見るに表には「久松玄蕃へ」裏には水隠梅里と記されてある。

「はて水隠梅里……水隠……」突然のことではあり眞逆光圀卿が此の附近へお越しになられたとは氣が付かぬから訝かりながら封を切つて見るに、此度徵行を以て西國筋に漫遊を思ひ立ち、昨具兵庫の菊水屋と云ふ旅籠屋へ常陸の百姓

光右衛門と云ふ名前で泊つたが、夫れに付け本日南朝の忠臣楠正成公の墓前に参詣して見るに存外に廢頽して誠に感慨に絶へぬから新たに石碑を建立したかと思ふ、然し兵庫の地は櫻井殿の領分ではあり、且つは聞き及ぶに先般土地の有志等が楠公の墓を再建する計畫あつたのを何う云ふものは是れを殿しく差し止めたか、元より夫れについて何か理由のあることと思ふか兎も角此度予は建立するから其旨承知をするよう、尙前申す通り此度の予は微行であるから事々しくせぬようにして貰ひたい、と云ふような意味を記されあつた。文面の常陸の光右衛門と云ふので初めてハツと氣のついた玄蕃驚いたの何んでは無い「エ、ハツ、さては水府御老公には意外にも兵庫まで御趣し遊ばされたさ心得る、久しく拜顔もせつ且つは主君の御領内に御滞在とあつては是非にお目通りも願はずばなるまい、殊にお微行の趣き、それでは下役人共に何か不都合あつては申し譯は無い」と云ふので其儘俄かに登城して主君豊前守へ

言上するに豊前守も又た非常な驚き「では直様是れより其方馳せ向ひ、兎も角も當城内へ御案内致すよう計らへ」「畏こまりました」「夫れにつけ楠公の墓碑建立については予もかれて心にかゝらぬことは無い、夫れを果さる内に水府公のお目に止りしは甚だ以て恐れ多し、其方より宜きに傳へ、若し相當の御用あらば何事なりさもお受けを致すよう」「ハハハツ……」

豊前守は斯く命を傳へながら何心なく御書面の文面を見て俄かにキツさなつた「コレ、玄蕃」「ハハハツ……」「此の御書面によれば楠公の墓碑建立について曩に何者が計畫を致したものがあつた見へるが如何なる次第をもつて差し止めた」「ハハツ、其儀に付いて某しも不審に存じましたる爲め實は御伺ひ致すべきかき存じ居りましたる處にござりまする」「ナニ、其方も存ぜんさか」「御意にござりまする」「フーム、予も初耳である、何者が差し止めたか其方より深く詮議を致すよう」「心得ましてござりまする、定めて代官の計ひと存

「じますれば殿しく詮議致しまする」「フム、兎もあれ大儀ながら是れより兵庫へ立ち越し、水府公へ宜しく傳へい」「ハッ……」

「支藩は退出して急ぎ供揃ひを命じ、萬五郎に案内させて兵庫へ乗り込んだのは日も西に落ちた黄昏時であつた、見ると菊水屋の表戸は何日に無く早く鎖の付く行燈には燈明も入れては居らぬ、が急いた一同の目にはそんなことに氣の付く筈は無い、其内にも萬五郎は家老の來たことを一時も早く光圀卿へ通じようと思ふので支藩の一行を門口で待たせなき、自分は先づ内部へ飛び込んだ」

「やア、只今歸りました、御隠居様は定めてお待ちかねでございますうな」と愛嬌を振りまいてお部屋の方へ通らうとするのを何うしたことが此家の女房は大變な權幕で行手に塞がつて大聲で。

「お客さん、大變なことが出来ました、家の人を何うして下さる」「エッ、ナッ、何んだ」「何んだごころか、貴郎方の爲めに家の人まで大變な迷惑が掛り

ました、さア早く家の人を返して下さいよう」「オイ、ちよッ、一寸待つた、一体何うしたと云ふのじや」「お前さん等ナンコーとやらの墓を建てると云ふので家の人まで連累にせられてお役人に引つ張つて行かれました」「エッお役人に……それでは御隠居様も……」「勿論で第一張本人はアノお爺さんから起つたのじやございませぬ、か、それですからお爺さんが引つ張つて行かれるのは當然でございます、第一私の方の人は何んにも知りませんのに連累……」「エ、ッ、では御隠居様が……そりや捨てをかれぬ……」「イーエ、お爺さんは何うでもよろしいが私しのほうの亭主を……」「そんなごころでは無い……」

宿の女房の取りすがるのを振り放しながら門口へバタ／＼と駆け出した。

「ホッ、御家老様、たッ、大變でございます」「エ、ッ、御老公には何んさか遊ばされたさか」「何事が存じませんが代官所へ引つ張つて行かたさうでござ

「さいます」 「ナニツ、代官所へ……」 「左様でございませう、何かの疑がひがあつて此家の亭主なぞと一緒に引ッ張られたと申して居りますから」 「そッ、それこそ大變じや、萬一不都合あつては相濟まん、では是れより直ちに代官所へ向はふ」

何がさて光圀卿當時の御權勢の天下の副將軍として將軍の次ぎに位ひするほどであるから何處の諸候もピリ／＼して居る内にも、高五万にも足らぬ尼ヶ崎の城主なぞには陸軍の尉官が將官に接するほどより以上の隔てがある、それでお徴行さば云へ夫れほどの光圀卿が自分の領地へ來られたとあつては捨てなくわけにはなりかねるさ云ふところから取り敢へず家老の久松支蕃に命じて御機嫌を伺はせに差し向けたのであるが、其支蕃漸くのことでお宿へ來て見るに當の御人は何んな間違ひはあるさば云へ、下役人等の爲めに不淨の繩をかけられたばかりか其まゝ引ッ立て、行つたこの事に驚きも驚き、顔色變へて大變な

驚き「如何に譯の知らぬ代官さば云へ大變なことを致したものを、是れは寸時も捨てなけぬ」さあつて供揃へを仕直し、萬五郎を引き連れて代官所へ馳せ付ければかりに道を急いだ。

○そりや雪と炭の相違

代官石崎兵馬のほうでは下役人を菊水屋へ差し向け、菊水屋の亭主を初め光圀卿と名乗る不将者を召し捕らせたが、最早時刻も遅いので明日ゆるく詮議をしようさ云ふことにしてをかつた。

處へ不意に御家老のお出さ聞て大變な驚き「はて、御家老御自身が態々のお越しさは何が差し迫つての御用さ心得る、兎も角も……」と座敷の取り方付を家人に命じ慌て、出迎へた。

支蕃は其内も氣が氣では無い、兵馬の案内によつて一間へ通るさ尻も落ち付

かめ内から先づ口を開く。

時に兵馬、本日参つたのは餘の儀では無い、聞き及ぶに水府御老公には此度當地へ御漫遊の趣、其方は存ぜぬことはあるまい」「是れは御家老には思ひも寄りませぬ仰せ、決して左様の儀は承まはりませぬ」「イヤ、當地の菊水屋さやら申す旅籠屋にお泊りの處を何か不審の廉を以て其方の手の者召し捕りしよか聞き及ぶ誠に以て恐れ多き次第であれば、早々に是れへ御案内を申し上げ重々のお諾を致すがよからう」「恐れながら御家老、夫れは聊かお考へ違ひかさ存じまする」「ナニ……」「御意の通り光圀卿の御名を騙る曲者は前刻召し捕りましたなれど水府公さは雪と炭の相違にござりまする」「フム、然らば御名を騙る曲者さか……」「御意にござりまする、某しの察しまする處、菊水屋の亭主は聊か思惑のござりまする爲め何れよりか百姓老爺を味びよせ是れに光圀卿の御名を名乗せ居ること、心得まする」「はて……、それに致せ假り

にも尊き方の御名を名乗るほどのもの、其信偽は確と極めてござらうのオ」

「其儀は調べるまでもございませぬ、天下の副將軍ともあられる御人、如何に何うあらうとも菊水屋如き陋くろしき家にお泊りになるべき筈はござりませぬ又た第一に疑はしきは御風体にござりまする、某し未だ實見は致しませぬが聞き及びますに百姓姿と申すことにござりまする、是れさても尊き御人としてはあるましき事と心得ますれば……」「アイヤ、其儀なればかね／＼聞き及ぶに水府御老公には西山へ御隠居後、殊更ら賤しき御風体を以て諸國御漫遊致されたさあるにより決して怪しむには及ばぬこと」「エ、ツ、それでは御老公には左様の御風体を致されしことにござりまするか」「そののみならず前刻此方の手許へ差し越された御書面は紛れも無き御老公の御直筆と心得る、兎もあれ某し御目通りを願ひは眞偽は直ちに相判る、假令御名を騙る徒者に致せ町重に此の處へ案内致しくれるよう」「ハ、ツ……」

代官は何んさなく氣味が悪くなつて来たから慌て、其場を飛び出し、豚箱に入れた光圀卿をお出し申して其處へ御案内申し上げる。

光圀卿には代官のするまゝにお任せになつて一言もお出しにならなうだが、此の間へお通りになるさツカ〜と土座へ進まれ、お腰をお下しになつて支藩の方をザロリとお眺めになる。

「オ、支藩、久し振であるの」「オ、ツ、是れは水府の御前には何日として御健祥の御儀、祝着至極に存じ奉つりまする」「フム、其方も無事で頂上、さころで支藩、予は今日豚箱に放り込まれたぞ」「ハ、ツ、存ぜぬござり申せ誠に恐れ入りましたる次第……」「イヤ〜、前刻予の本名を記したる書面を代官、手許まで差し越したるに拘らず此の仕末である、其方も定めて夫れが爲め参りくれたるものと思ふが、今宵其方が來れば一夜豚箱の中で明かす處であつたぞ」「ハ、ツ、何んさも恐れ入りましたる次第、代官の不都合さは申せ

豊前守を初め某し共に至るまで御申し譯の道もござりませぬ、就きましては前刻某し邸まで御差し越し頂きましたる御供の外、定めて他にもござりませぬ、存じまするが……」「如何にも兩名のものはあるが是れも予と同様今尙豚箱の中に居るぞ」「そつ、夫れは怪しからぬ、コレ兵馬……」「ハ、ツ……」「不埒者め、是れなる御人こそ紛れも無き水府公である、殊に承はるに御老公より態々御書面を頂戴致しながら假令僅かな間なりとも歎ろしき處へ入れ奉つるさは何事である」「まツ、誠にもちまして相済みませぬ仔細……それよりも先づ御兩名の御家來もおさめをき申してあるさか早々に是れへお伴れ申せ」「ハ、ツ……」

代官は是れを聞て腰を抜かさんばかりの有様、ワナ〜震ひながら立ち去らうとする時、光圀卿には嚴然とお聲をかけた「アコレ〜一寸待て」「ハ、ツ……」「兩人の外に今一人ある筈じや、其者も召し連れるよう」「ハ

氣の毒である、それとも何か宜しからぬことでもあるさか「ハイツ、恐れな
 がら申し上げます、實は彼れなるもの聊か企む處ござりまする爲め、或ひは
 何れよりか御老公に似たるものを語らひ、假に尊き御名を騙らせましたるもの
 ぞ存じましたれば……」
 「ナニ、聊か企む處ありさか、是れはいよく容易な
 らぬこと、然も其事を遂げるについては予の名義無くては適はぬことさか、事
 体何事である」「ハツ……」
 「詳しく語つて聞せへ……コレく菊水屋の御
 亭主、遠慮には及びません、モツト此方へ来るが宜しい」「ヘエく、ジツ、
 何うも恐れ入りまする」「お前さん何かい、今此の代官の話しを聞くさ何か企
 みがあるそうなが自体何んなことを目論で居なさる」「ヘエツ、企み……モシ
 御冗談ではございませぬ、私しが何を悪企み致しませう」「ハハハハハ、企
 云ふたところで悪企みに限つたことばありますまい、又た世の中の爲めになる
 企みもありませうから」「ヘエ……」

菊水屋の親爺は今さらながら呆氣無い顔をして光圀卿とお供の三名の顔をジ
 ロく眺めてをる。
 「まあさ早い話しが正成公のお墓を建てようさいる、相談事をするのも企み
 であれば又た何か新しい仕事をしようと思惑立てるのも……」「ヘエく、イ
 ヤ判りました、如何にも二三年前に正成様のお墓を建てようさ企みましたが今
 はそんな企はございませぬ」「フーム、けれども代官の話しては何か知らんが
 私しの名を使ふて目論もうさ考へるようなことがあるようですか」「ヘーン、
 貴郎の名、モシ失禮ながら貴郎は眞實のお百姓でも無いらしふございますか一
 体何誰でございます」
 菊水屋の亭主は餘りに心易そうに云ふので久松玄蕃は最前からヒヤくし
 て居つたが遂には堪へかれてかキツさなつて「コリヤツ、無禮を申すな」「ヘ
 ーン……」

いよく呆れる様を見て光圀卿にはニコ／＼微笑まれながら「アコリヤ支蕃
苦しふない棄てなけ」「ハハツ、なれども餘りの無禮」「イヤ／＼、咎めるに
及ばぬ」「ハハツ……」「其方大儀ながら予の本名を名乗つてやつて下され」
「ハハツ……」

光圀卿のお言葉によつて支蕃はキツさなつて云ふ。

「コリヤ菊水屋さやら、是れなら御方の御本名と聞かせて取らす謹しんで承ま
はれ」「ヘーン……」「ヘーンさは何んだ、是れに在せられるは常陸の國水月
の御城主徳川光圀卿であるぞ」「ゲエツ……あツ、彼れが……」

驚いて二三間後へ飛び下り、いよく呆れて俄かに口さへ利さかれて居る
光圀卿は其体を眺めていよく御機嫌麗はしく。

「ハハハハ、コレ／＼御亭主、吃驚するには及ばぬ。許す、近ふ参れ」「ド
ツ、何う仕まつりました」「ハハハハ、だが聞き及ぶにお前さんは正成公の

墓を建立しよう目論たそうであるが中々感心な心がけじや、處で支蕃

「ハツ……」「其目論見を豊前守殿には何故か厳しく差し止めたさやら聞く
が是れには何か理由のあることと思ふが何うじや、町人の身を以て左程までの
心掛け褒め遣はすこそ至當さと思ふに是れを厳しく差し止めた刺さへ叱り付け
たさある、甚だ以て其意を得ぬ次第であるが」「ハハツ、其儀御書面によつて
始めて聞及び、實は主君になきましては意外に思はれ居りまする、尤も楠公墓
碑の建立に就きましては主君に於きましてもかれ／＼申され居りましたなれど
未だ運びには至りませぬ」「フム、すれば菊水屋の亭主なそれが目論見し儀は豊
前守殿には少しも承知致し居らぬさか」「御意にござりまする」「それはい
よく以て怪しからぬこと、然らば何者によつて差し止めた」「主君に於まし
ても今日の御書面によつて初めて承まはり、非常の立腹を以て某しに厳しく取
り調べるようござりました」「フム、如何さまそうなくては適はぬこと、忠

臣孝子の後は出来得べきだけ町重に致すは一國の城主として常に心がければならぬことである」「ハ、ハ、ハ、ハ……」「兎もあれ此度のことは、其方取り調ぶるさあれば予は一切何事も云ふまい」「ハ、ハ、ハ、ハ……」「就ては前刻書面を以て申し送りし儀、豊前守殿に於ても異存はあるまいの」「恐れ入ります、御念に及びませぬこと、なれども主君豊前守に於ましては御老公の御目に止るまでも無く、疾くより墓碑建立の思惑ござりましたなれども何か取り紛れ今日に及びましたる仔儀ござりますれば此度宜敷言上致すようござりまする」「ハ、ハ、ハ、ハ……、がまづ異存なしとあれば予も満足に心得る、就ては石碑は既に當地の石屋兵助なるものに誂へ致したなれども是れに建つべき地所を何れかに撰びたく心得る」「ハ、ハ、ハ、ハ……、恐れながら廣嚴寺の境内には如何にござりまする」「されば、夫れもよくはあれど現今の正成公の墓を見るに四方には雑草生ひ茂り、誠に氣の毒とも思はれるほど、是れとても和尚の心掛により如何

ようともなるを如何に無縁の墓なりとも線香一木を供へるは愚か、掃除すらせぬようでは折角新に建立をするさても此の後は心許なく覺へる、それよりも何れかに地を展いて別に建立し、時折は四方の手入れを致さすれば是れに越したることばあるまい」「ハ、ハ、ハ、ハ……、然らば何れかに相當の地を撰びますれば明朝まで御猶豫のほど願ひ上げまする」「如何さま一朝一夕にはなりかねるであらう、然らば其儀は其方に任まであらう」
そこで光圀卿には玄蕃等が何れが相當のお宿へ御案内をしよう云ふのを振り切られ、菊水屋の亭主を案内させて一先づ旅籠屋へお歸りになつた。

〇水戸の殿様御宿

菊水屋では常陸の百姓と云ふたのは百姓どころか水戸光圀卿である云ふことが判る。此處でも俄かに大膽さを初めた翌る朝になると亭主は皺だらけなが

らも羽織袴を着代へる、表へは幕を張る、入口へは砂盛をする、軒行燈は取り拂ふて其處へは水戸の殿様御宿筆太で記した長い紙をペタリと貼り、其又た横へ一般のお客様御断り云ふこと張り付けたから驚いたのは一町内の人々「エ、オイ、菊水屋は何うしたのだらう」「さア、何んだか水戸の殿様御宿さか書いてあるが何んな貧乏殿様たつて彼んな陋ろしい宿には泊るまい」「まつたくだ、オヤ、一寸見い老爺め何んだが大層らしい羽織袴を着けて居るぞ」「フム、では眞實は殿様が泊つたのだらうか」「だが何は物好の殿様だつて彼んな處へ泊るものか、ヒヨツとするさ氣でも狂ふたのではあるまいか」なぞと評判を初める。

ふので根が正直な男だけに「夫れではお客様に對して相濟まぬ、菊水屋が客止となつたなれば定めて外の旅籠屋へ代つたのであらう、夫れにしても其代り先を聞てなかねばならぬ」と考へたので早速菊水屋へ飛んで行つて詳しく聞き合すと百姓と思ふた御人こそ水戸の殿様と判つたから是れも大悦こび、早速馳せ歸つて是れも俄かに店先を掃き清め、菊水屋と同様、門口には幕と盛砂を飾り付けたが夫れだけでは物足ぬか店の仕事場へは七五三繩を四方に吊り下げ何處から手廻はしたか烏帽子直垂を身に付けて丸で刀鍛冶が名刃でも鍛へるさ云ふ風体でコツ／＼と仕事を初めた。

町内の者は是れを見ていよく大騒ぎを初めた「オイ／＼一寸見い、石屋の兵助までが大層なことをやり出したぞ」「フム／＼、では何んだらうか水戸の殿様云ふのは眞實に菊水屋へお泊りになつて居られるのだらうか」「さア、眞逆嘘でも無いらしい、是れじや町内でも默言へ捨て、をくわけにはなるまい

何んさかしようじやないか」「そうだな、殿様が眞實にお越しになつて居られるさするさ棄て、さくわけにはゆくまい、兎も角も菊水屋で尋ねて見よう」さ云ふようなことから町内の重立つた人々等五六人相談を調のへて菊水屋の表へ出掛けて見て又もや驚ろいた。

「オイ、豪いこさちや、彼れを見い」「フム、何んだかお侍ひが澤山居るなア、彼りや矢ッ張り水戸の殿様の御家來だらうか」「いん、違ふ、あの狭ん箱には御家老様の御紋がついて居るから多分御家老様が出かけて來たのだらう」「エ、ッ、御家老様御自身でか、ぬらいもんじやなア、御家老様が態々此地へお越しになるなぞは十年に一遍も無いこちやが、夫れでは矢ッ張り水戸の殿様がお越しになつたから多分御機嫌伺ひさ云ふようなことだらう」「それ、それに違ひはあるまい、それにしても菊水屋は下豪いお客様を泊めたまもんじやな、あの變屈老爺め旨いことをしよつた」「だがそんなことを羨や

んださこで仕方がない、いよく殿様がお泊りになつて居られるさするさ町内一体に幕でも張つて不都合の無いようにしよう」「違ひ無い、それでは直様廻文を廻そう」

重立た人々は慌く、其事を町内へ傳へるさ忽ちの内に一町内は悉く幕を張る、兩方の辻へは大きな砂盛をする、自身番を設ける、其町だけは一般の通行止をするさ云ふ有様で大變な騒ぎとなつた。

一方では家老の久松玄蕃は代官の邸へ其晩光圀卿の御歸りを玄關まで御見送り申し上げ、それから恐れ入つて居る代官を殿しく詮議に及ぶさ、初めの内こそ事を左右に構へていろ、云ひ繕はふさしたがつり、終ひに白状したの如何にも兩三年前に菊水屋の亭主を初め其他の者等が桶公の墓を再建するこゝさについて計畫はあつた、其當時普通なれば早速許可をする筈であるけれど、も届け出の際音物の少なかつたことから妙な意地が出来、其爲め許さなんださ

云ふことであつた。

支蕃は其事が判るに大變な立腹「事は恐れ多くも水府御老公の御耳へ這入り夫れが爲め殿に於せられても非常にお心を惱められるようなことゝもなつたのであるから此のまゝでは濟ますことは出来かねる、兎もあれ御老公の御裁可を受けらるまでは謹愼を申し付ける」さあつて數人の家來を付け、閉門同様な處分を行ひ、翌朝菊水屋へ伺ふて委細を光圀卿に言上する。

光圀卿には常々御寛大の御氣性ではあるけれども何分にも事が事であるから此度は軽くお濟ましになられぬ「斯様の儀は下々より申し出るまでも無く上役人たるものに於て計ふべき筈、然るに夫れを度外にくばかりか其申し出でを僅かなる音物を望まん爲めに差し止めることは論外の至り、兎もあれ其方の心によつて重からぬ計ひを致すよう」「ハ、ツ、恐れ入り奉りまする」
支蕃の處存では此度は恐れて取らずと仰せられた處で主君豊前守への手前

且つは光圀卿への心をかかれて何んぞか處置せればなるまいと思ふて居つたほどそれが重からぬ計ひさ云へば罪は全く許されたのでは無いのであるから、いよく棄ててくわけにはゆかぬとあつて其日の内に代官へ命を傳へ、水府御老公のお情けにより特別の憐愍を以て切腹を仰せ付けられること云ふことであつた、切腹では餘り特別のお情けには無いようだが討ち首、獄門などに比べたなれば武士としては軽い計らひであつたのである。

○お金の代りを仕事でする

尤も支蕃から代官へ切腹のこゝを申し渡したのはお宿を退出してから後のことであつたが、光圀卿には代官の處置を云ひ渡された後、いよく楠公の墓碑建立の御相談がある、支蕃も此のこゝについてには尼が崎を出立する時、主君豊前守から内命があつたからいろ／＼と申し上げる處あつて光圀卿のお言

業により、廣嚴寺以前の土地を彼れか是れか詮議の末、廣嚴寺から少し南方に適當の空地のあることを申し上げる、そこで光圀卿もお悦びになられ、場所は其處に定めることにお取り極めになられて一方兵助のほうへ事をお話しになられる。

さア斯ふなるさ菊水屋の亭主は勿論、先に計畫をたてた人々を初め土地の者等は知るも知らぬも非常な悦びで土地の地均しをさして頂きたいと願ひ出るものもあれば、何んでも宜しいから相當の御用を仰せ付けられたいと願ひ出るものも續々あそる。

それで是れ等の者の内、貧乏人だけに特に御用事を御申し付けになり、夫れ相當の日常をお取らしになられるからいよいよ光圀卿を神様が佛さまのようになり、の評判となつたが夫れにつけ領主の櫻井豊前守の風評は次第によく無いような傾きか見へたので、三日にあげず御宿へ伺ふてなつた支著はフ

ト其事を聞いて「是れは大變……」と豊前守へいろ／＼相談した結果、幸ひ臺石が適當のものがまだ見付からの折柄であるからセメテそれだけでもお手傳をせねばなるまい」と云ふので八方に人を出しいろ／＼尋ねた上、ヤツと探し當たのは其大さ一丈四尺四方を云ふ稀大の大石、是れを櫻井家から寄進することとなつた。

處か此の稀大の大石は成程見事なものではあるけれども高さが四尺足らず、横巾が一尺六七寸の石碑を載せるのには餘りに大き過ぎる、と云ふて折角見事な臺石があるのに是れも使ぬは勿体ないと云ふ處からいろ／＼とお考へになられた末、兵助の石置場に丁度頃合ひの白川石があつたのを幸ひ是れもお買ひ取りになられて是れを石碑と臺石の間へ挟むよう拵らへよと仰せ出された。

すると例の變風者の兵助「委細畏まりました、就きましては殿様、私しの聊が願ひがございます」「ホ、ー、お前さんの願ひと云へば定めて手間賃を

直上げしてくれさでも云ひなさるか」「メツ、滅相な、そんなことを申し上げて罰が當ります、實は一寸お願ひがございます」「左様か、兎も角も云ふて見なされ、物によれば聞きませう」「へエ、外でもございませませんが、今度の事なぞは失禮ながら私しも實はエライ感心をして居りますので……」「ホー……」「それで大体から云へば鑑一文も貰ひたくはございませぬのですが夫れでは私の方も喰べることは出来ませんからホンの心だけの御寄進をしたふございませうから何うでございませうお許しを願へませう」「イヤ、中々感心な心掛夫れだけ聞けば私しも充分じゃ、併し別にお前さんから寄進をして貰はずとも彼れを拵らへるくらいのお金には不自由もありませんから別に……」「さ、そう取つて貰つては困ります、元より水戸のお殿様さビイ〜暮しの私しなぞまは一つにはなりません、到底お金の寄進なぞは出来ませんが仕事で少々致したいさ存じます」「ナエ、仕事で……」「へエ、外じはございませぬ、今度お

誂へ頂きましアノ中石でございませぬが、何うも石のまゝでは面白くございませぬ、就きましては彼れへ私しが一生一代の仕事をして見ようぞ存じます」「ホー、して如何よアの細工をする」「へエ、お話しをせれば判りませんが實は私しも石細工にかけては同じ商賣の者には負けぬつもりでございませぬ、其内でも自慢ではございませぬが龜を彫ることは一番得意でございませぬから其龜をアノ中石に充分腕にヨリをかけて彫つて見ようと思ひます」「ホー、龜を……是れは面白い、それでは宜さそうに任しますから彫つて下され、何れ出来あがつた上は些少なから褒美を差し上げませう」「モシ、それは不可ませぬ、大体仕事さ云ふ奴には慾があつてはドーモ旨くいけません、又たそんなことを云はれるさツイ腕も不可なりませぬから其お話しだけは御無用に願ひます」「だが夫れでは……」「モー結構、お許しさへ頂だけは此上お願ひはございませぬ左様なら……」

其まゝ、ナイと飛び出して仕舞つたから光圀卿も強てお呼びさめになることも出来かねて、何れ出来あがつたなれば何んさか多少のものを取らそうと思はれた。

がそれにしても御滞在中、例の御氣性から第一にお困りになられたのは町内の犬層たらしい設備である、砂盛や幕などを打ち張つたのすら反つて有難迷惑に思はれて居るさころへ一町内は通行止の剩つさへ一同は商賣休み同様の体であるからいよくお心に適はぬ、さころへ此處は西國筋の諸候達江戶参勤の通路に當つて居るから其大名等は光圀卿の御滞在中云ふことを聞て途中ながら御機嫌を伺ひにくる、墓碑を建立するについて何かさお手傳を致したいと申し出でる、それ等を一々お受けになるのは煩らばしいこと一通りでないので遂には菊水屋の亭主を通じて町内のものに云はすが一同は「そんな勿体ないことか出来るか、彼れほどの殿様に不都合あつては申譯が無い」と何うしても

聞き入れぬ。

是れには流石の光圀卿もホト／＼お弱りになられ遂には此處を御出立になつて尾が崎までお戻りになり、石碑の出来あがるのをお待ちになられることゝなつた。

其内に地均しも濟み、石碑も出来たこと云ふことなので御實檢になられると中々立派に出来あがつてなる、臺石は櫻井家から寄進をしに一丈四尺四方の御影石、其上へ兵助が丹青こめて彫つた白川石の龜を置き、其脊の上へ載せた石碑はチヤンと仕上げて高さ三尺八寸、巾一尺六寸、是れへ彫りもあざアかに「呼鳴忠臣楠氏之墓」の八文字、其裏手へ正成之靈を祀る、源光圀之作の數文字、是れも御自筆のまゝ筆法は少しも亂れてはならぬ。

「ア、よく出来た、是れでこそ地下の楠公も少しは心も休んじられるであらうと中々の御機嫌で石屋兵助へ改ためて彫ながら引出物を下げ渡され、又た菊

水屋の亭主へに存外のお褒めの言葉を持たせて此處を御出立になられた。
此の石碑こそ現今神戸の湊川神社の境内、東手の隅にあるもので、其下には神鏡を石棺に納めて埋められてあると云ふことである、又た廣嚴寺に云ふのは是れも俗に楠寺と呼んで今尙残つて居る。

○櫻の木にお塞銭

兵庫を御出立になられた光圀卿には一の谷の古戦場も、舞子、須磨の景色も其他名所古蹟と呼ぶ處は洩らさず御見物になられ、それから明石へお着きになつて先づ人丸神社へ御参詣になられた。

高い石段を漸くのこさにお登りになられ、フトお見返りになられると浦の景色は一目に見られる、鏡のような海を隔て、繪に書いたような淡路島は近く控へ、其前を行き交ふ眞帆片帆は千鳥となつて思ひ／＼に進む様、實に何んとも

云はふようなき宜い景色。

「ア、中々のよき眺めじや、何うじや助さん格さん、何んさか一句は出ませぬかな」「恐れ入ります、武者のこさでございますればさても及びませぬ」「ハ、いい、だが此の人丸は和歌三神の一人として知られた歌人じや、それで昔し歌の徳によつて盲人の目を明けたと云ふ話があるぞ」「恐れながら夫れは如何ようはこさでございます」「されば、昔し筑紫の國に或る盲人があつたそれがはる／＼都へ志さす途中、此の處まで來ると此處は中々に景色のよい處まで來ると此處は中々に景色のよい處であるさ聞たので一目なりさも見たいと思ふたが、盲目の悲しさに何うしても見るこさは出來ぬ、夫れが爲めホト／＼我目の見へぬを不甲斐なく思ふの餘り「ほの／＼と、誠明石の神なれば、我れにも見せよ人丸の塚」さ一首の和歌を詠むと其歌の徳によつて忽ち目か明いたと云ふことじや」

御話しを聞いて居つた萬五郎、横合から口を出して「へーエ、それでは御隠居様、目の無い人が此處で歌を詠めば目が出るのでございますか」「真逆そんなことはあるまいけれども是れは昔の話じや」「だつて丸ツ切り無いことは申しますまい、火の無い處に煙は立たつと云ふ譬もございませうから」「或いはそうかも知れぬ、此の社の境内に盲杖櫻と云ふのがあるさ云ふから」「へー、それは又た何んでございませう」「其盲人が持つて居つた櫻の杖だが、目があいたので用事が無いと云ふので地上へ挿したそうじや、處か其杖は何日のまにか根が出来てだん／＼大きくなり、毎年見事な花が咲くそうじや」「でございませうか、それでは矢ツ張り目の出来るのも眞實でございませう、すれば博徒に知らしてやれば悦ぶでございませう」「何うして……」「へー、へー、塞の目が出れば勝つに定つて居りますから」「へー、へー、へー……」

お笑ひの内に其處をお歩みになり、境内へ這入られて先づ社前に參詣を済ませ

され、彼方此方をアラ／＼御覽になるさ、七五三繩を張つた一本の櫻の木があつて其側に盲杖櫻と認められた立札が建てたのにお目が止まつた。

「ホー、萬五郎、前刻申し聞かした盲杖櫻と云ふのは是れじや」「その……盲目の杖を突つ込んだと云ふ奴でございませうか、へー、成程……」「今は時候が時候だから花も無いが春先には随分立派に咲くそうじや」「左様でございませうか……」

萬五郎は光圀卿のお言葉によつて暫らくはシロ／＼と盲杖櫻を感心して見てなつたが、俄かに何事か思ひ當つた様子。

「モシ御隠居様、是りや油断はなりません」「何がじや」「何がッて第一杖を地上へ差して夫れから目の出る筈はございませうものか、是れはエ、加減な作り事に定つて居りますな、それから此んな處へ塞錢箱を置くなぞさは是れもアシマリでございませう、何處の國にか櫻の木へお塞錢を上げるものがございま

すものかい。「コレ」萬五郎、故事は疑ふものではない、万一神官なぞの耳へ這入つては五月蠅から「へエ、だつて餘んまり慾ほけて居りますもの、故事が乞食が知りよせんが假令何うあらうともこんな處へ塞錢箱を置くような神官はロクな奴ではございませんで、それに昔は杖であつたさすれば上のほうに切り口がある筈でございませう、何んな杖にしたところで杖の先を切らずに切する奴がありますものか、夫れに何うです幾ら後で芽が生へましたところで切り口が無くなるさ云ふ筈はございませぬものか、是れは矢ッ張りイカサマものでツマリは塞錢を取りたいために慾張り神官のした仕事に相違はございませぬ、何んさ太い奴ではございませぬか」「コレ」アマリ大きな聲を出すもので、は無い、万一神官に聞こへては宜しく無いから」「ナニ、構ひますものか、善いものを悪いさ云ふて居るのではございませぬ、大体此處の神官はアンマリ慾張り過ぎますから……」

尤も今は塞錢箱なぞは置いては無いけれども昔しは其根本に掘へてあつたそので、其上四方には竹の垣を圍らし、神木として中々八釜しかつたのである、萬五郎は其側に立ち寄つて附近構はずペラッ喋言つて居るのが神樂殿に居つた神官の耳へ這入つたからたまらぬ、此方を見てクワツと睨んだと思ふ間も無く忽ち下りたつてバタッ駈け付けた。

○五兩の金を出せば許してやる

萬五郎の方ではそんなことには頓着なく一同平氣で「子一御隠居様、昔から坊主に神官ほど剛慾のものは無いさ云ひますが眞實でございませぬ、杖にして居つた枯木に根が生へたなぞそんな馬鹿らしいことがございませぬものか又た是れにお塞錢をあげる奴の氣が知れませぬや……」なぞと相變らず吐鳴つて居る處へ駈け付けた神官、イキなり萬五郎の右の手を掴んで大變な權幕。

「コリヤ〜無禮者め、貴様は全体何んだ」「ナニツ、已ア人間だ」「黙れ、是れなる神木に向つて何んぞ云ふことを云ふだ」「神木だ、つまり櫻を神木なぞさば丸ッ切り尻が笑はア、何が神木だ、聞けば盲人の差した杖が芽を出したんださか、ハ、ハ、ハ、世の中にそんなことがあれば枯れた木が一本も無い答だ、神様の靈験と云ふたらうが夫れほど靈験のある神様なれば彼のお屋根の朽ちたのを元の通りに何故出来ぬ、又た鳥居なぞ、建て代へすとも夫れも靈験で芽を出すようになりそうなものだ」「已れいよく〜下埒なることを申す、兎も角も代官所へ参れ」「代官所へ参れたさ……尻でも喰へ、憚りながらそんなことで代官所へ引ッ張られるような人間とは違ふわい、モ〜一遍頭でも洗つてこい」「いよく〜以て怪しからぬ奴、此の上は容赦相成らん……」
いよく〜怒つた神官は無理やりに萬五郎を以ッ立てようとするさ、此方は此方で是れを拒みながら罷り違へば今にも鐵拳の二ツ三ツ打ち下しかまねしき有

光圀卿は前刻來シツと其成行を御覽になつて居られたが此時ツカ〜さお出ましになられてお言葉も穩やかに神官に向つて言はれる。
「モシ、お願ひでございます。是れは私しの同伴の者でございますが昨今少々逆上せてございますので御立腹は御尤もではございますけれども何うか御勘辨を願ひます」「ナニ、貴様の同伴ださ……貴様は一体何國の者じゃ」「ハイ、州廻りを致すつもりでございます」「すれば此者は貴様の供人か」「ハイ、供人と云へば供人、同伴と云へば同伴でございます、何分にも年をさりますと若い者の同伴が無ければ心許無いと存じますものでございますから一緒に参りました、何うしたさか途中で少々氣に變になりましたので……此度のごころは何うかお許しのほどを願ひます」「勿体なくも神木へ對し悪口雜言を

致したる許し難き奴ではあれど貴様の云ふことを聞けば又た不憫さし心得る……」「ハイ、それではお許し下されませうか、コレ、萬五郎お許し下さるこの事じや、さ、お詫を申し上げて早く行きませう」

萬五郎の手をお取りになつて立ち去らうとするのを神官は慌て、押し止め。「コリヤ待てツ、許して遣はすに致せ其儘では相成らぬぞ」「エツ、それでは何う致しますので……」「それは、申すまでも無いことじや、是れなる神木は此の者の悪口雑言によつて汚されたのであれば一應潔めれば相成らぬ」「左様でございまするか、水でも掛けまして……」「馬鹿ツ、左様のことは無い清拂ひの祈禱と云ふのを致さねば相成らぬ」「へ、左様か夫れでは何うか宜しく願ひを致します、さ、萬五郎行きませう」「コリヤ、待たんか」

「ハイ、また何か御用がございますか」「無論のこと、其今申した清拂ひの祈禱に付て祈禱料が要るぞ、さア夫れを貴様が出すか、祈禱料さへ出せば此

もの、無禮を許して遣はすが何うじや」「ハイ、成程、では早い話しかお金を出せば許すさ云ふことでございますな、ヤツ宜しい、出ませう、が併し何れほご出せば宜しい」「フム、出すか、ヨシ、夫れなれば五兩出せ、さすれば許してやる」「五兩……それはアンマリ高額でございますから少々おまけ下さいますまいか、凡て御祈禱料などは何處へ参詣しましても心持次第と云ふのは當然でございますから」「黙れ、今日のことは普通の祈禱、は無いぞ、勿体なくも神木に向ひ怪しからぬ悪口雑言を致したのであれば大体なれば此ま、代官所へ引ツ立てべきの筈じや、それを貴様が強ては願ひによつて祈禱料だけで差し許すのではないか」「ハイ、ですから私しも心任せには申しません、何分にも遠方から出て参りましたので肝腎の旅費に不足があつては忽ち困ります、それで御無体ではございますが今少しお負けを願ひたいものでございます」「フム、すれば何れほごに致せと云ふのじや」「左様でござい

ます……オ、それ、此處に丁度お金が一朱ございますから何うか是れで御勘辨を願ひます」

一朱と云へば一兩を十六に割つた一つ、五兩から見れば八十分の一の端下金一旦は光圀卿のお取りなしによつて機嫌の直つてなつた神官は忽ち尊業のよくな青筋を額へニユキ／＼と出してキツとなつた。

「コリヤツ、貴様までが此方を愚弄すさか、是れくらいのお金を大層らしく出して勘辨しろさは何だ、只の祈禱にしたところで二歩は普通と云ふことを知らぬか」「左様でございますが、旅のものでございますからトント勝手は判りませぬ……それでは仕方ございません、出ませう」「エツ、五兩を……それは奇特じや、早く出すがよい、それなれば許して遣はそうから」「メツ、滅相な、此の坂から飛び下りたつもりで二歩だけ張り込みますのじや」「コリヤツそれくらいのもので何んになる、何うしても五兩出さんな、それなれば容赦相

成らぬ、貴様も同罪じや一緒に代官所まで参れ」「ハ、ハ、ハ、ハ、二歩に負りませんか、可ければ仕方がございません、今度は私の方からお断りじや」「ナニツ……」「お金も出さねば代官所へも参りませぬ、ハ、ハ、ハ、ハ」「已れ又しても愚弄致すか、此上は一切容赦相成らぬ、ウメツ」

神官はト／＼腹に持ちかねたがイキナリ拳を固めて光圀卿に打つてかゝるさ、此方に控へて様子を伺ふて居つた佐々木 渥美の兩士は「それツ」云ふが早いかづつと飛び出して左右の利腕をグツと掴んだ。

何方か一人だけでも中々適はぬところへ御念の入つた兩士が左右から力を極めて痛手を入れたので可愛そうに今まで威張つて居つた神官はビリ／＼動きも出来なくなつた、只た顔を曇めて「いッ、痛い、放せ、はッ、放してくれツ」

と藻掻て居るより仕方は無い。兩士はそんなことには頓着なく、シツカと持つた手を掴つたまゝ、助三郎先

づ恐る／＼云ふ「如何計らひませう」「フム、此有様では何うせ参詣の者に何か口實を付けて祈禱料とやらを強請ること、思ふから少しは懲さすはなるまい」「ハハッ……」「が此處は神前じや、餘り手荒なことをしてもよくはあるまい、兎も角も其櫻の木へ縛り付けてやりなさい」「畏まりました」

盲杖櫻の根本へシツカリ縛り付けたが、櫻の木は葉の茂る時分は随分毛虫の澤山あるものである、處がそれへ縛られた神官は何うにかして免れようと思つて、體をいろ／＼と藻掻くから其度ごとに上からバタリ／＼と頭の上や襟の中へ落ちかゝる、縛られたのもつらいが是れは一層につらい」「コツ、是りやたまらぬ、たツ、助けて……」大聲出して呼び叫んでも彼方の方では掃除番や茶店の老爺などはリア／＼云ふて居るばかりで誰れあつて助けにくるさ云ふものは無い、其内にも参詣の彌次馬連中は遠く取りまきながら助けどころか中には「オ、イお百姓、彼の神主は仕方の無い剛愎者でお社の中で一般の人を意地めするば

かりが高歩を貸して此の邊の者を酷い目に合す鬼見たような奴ですせ、シツカリ仇を取つて下されやなぞ」さケシをかけるものもある。

光圀卿には是れ等をお聞きになつて、ニコ／＼お笑ひながら「何うじや神官さん、一同の方が彼の通りに言ふていなさる、定めて覺へがございませうな、ハハハハ、其入れ合せにゆるりさ其處で苦しみさつしやれ、ドレ／＼一服のみませう」さ傍の石に腰をお掛になり、稍暫らく様子を御覽になつて居られる

○下手人は私しじや

處へ誰れか知らしたか土地の代官政木藤馬と云ふ者、四五人の下役を伴れて駈け付けたが見るさ澤山な人群りなので漸く夫れ等を追ひ拂ひ、ツカ／＼と盲杖櫻の下へ近づくと神官は其根本へフン縛られ、毛虫責にあつて四苦八苦の體、けれども下手人らしいのが一向に見當らんから聊か張り合ひ抜けてキヨロ

「さ附近を見廻つて居るばかりであつた。」

光圀卿には煙草をバクリ／＼とお喫りになりながら此の体を御覽になり「ホ

ー、助さん、何うやら役人が来たらしい、一寸此處へ呼んで下され」「ハイ

ッ……」「下手人が判らんで可愛そうにマゴ／＼して居る、其處がら聲をか

けて早く知らしてやりなさい」「畏こまりました」

佐々木助三郎は光圀卿のお言葉によつて二足三足ツカ／＼と前へ進み、兩手

をバチ／＼と拍ちながら聲高く呼ぶ「オーイお役人、此方じやく」

其聲に代官はフイと見ると怪しげな百姓が此方を見て手を拍いて居るから譯

は判らぬが少々憤慨だと思つて其方へ足を運ばせながら于高い聲で云ふ「是り

やッ、百姓の分際を以て上役人に對し手を拍つとは無禮千万……、此方さは何

んだ」「ナニニ、何かお探しの様子でございますからお氣の毒に思ひ一寸知ら

してあげよう」と存じまして」「ナニッ……して其方は何んだ」「ハイ、私し

は……」と助三郎が云はふとするのを光圀卿にはお引き取りになられ。

「やア是れは御苦勞／＼、お前さんはお代官と見受けますが左様ですか」「如

何にも當所の代官だ、其方は何んだ」「ハイ、ハイ、私しかな、私しは常陸の

國の百姓……」「ナニッ、常陸の百姓……フーム……」

此程來尼ヶ崎の城主、櫻井豊前守の方から當所の城主松平采女正

の手許まで此度光圀卿西國御漫遊の事を初め御風体は百姓風である云ふ

ことまで詳しく知らせた上尙當領地内なる兵庫の代官は光圀卿とも存ぜず大

變な不都合をしたから貴殿の御領内でも氣を付けられるがよからうと注意して

來た／＼に采女正も大に驚いて直様下役人へ此の事を云ひ聞せ、万一切處

かて出會ふたときには不都合のないよう、且つは早速當城内へ注進する

命じてあつた。

夫れが爲め代官などは一同に注意を怠らなかつたが、此の藤馬、今光圀卿

の御容子にツツと目を付ける。御風体こそ百姓姿ではあれ何處ぞなく威のあ
る處へ餘りに落付き拂つて居るので、「若しや是れが……」と氣の付くにつれ、
目を付ける。其側には是れも百姓姿。さへ云へ骨格の逞しげな若者が二人ま
でチャーンと控へながら八方に眼を配つて寸分の隙も無い様、是れとても只人
では無い。「オ、さてはいよく水府の御老公に相違はあるまい、是れは迂闊
なことをしては取り返しならぬ味噌を付ける、さ云ふてお名前を尋ねるのも
可笑しな話し、はて何うしたものであらう……」とガツと詰つて目を白黒にさ
せて居るのを光圀卿はニコニコ微笑まれながら御覽になつて「ホ、お役人
何うか致しましたか、定めて神官に亂暴を働いたものがあるさ御聞き及びに
なつての御出張でございます、處で其下手人は私し達でございますが何うで
すお引ツ立てになりますか」。「ハツ……イヤ、何等の譯あつて斯様な亂暴を
致した」「ハ、ハ、ハ、私達は別段亂暴をするつもりではございませんが

神官にあるまじき追ひ落とし同様の行ひで大枚五兩を巻きあげよう致しました
ものですから已を得ず……」「フーム……」
是れとても百姓には出来かねる仕業、是れには代官もいよく困つて、いろ
／＼考へた末、手近に居る助三郎の側へツカ／＼と進み寄り「少々其許へお
尋ねを致す、全体彼れなる御老人は眞實のお百姓でござるか何うか打ち明けて
御申し聞けを願ひたい」「見られると通り常陸の國のお百姓、光右衛門と云は
れる御人じゃ」「さ、それは假りの御名で誠は水府御老公で、はござらぬか」
「ナニツ……」
助三郎はツツと光圀卿は御様子を見つて「ナニツコリお笑ひになつたま、ハ、ハ、
ハ、助さん、何うやら發覺たらしい、本名を聞かしてやりなさい」「ハ、
ハ、畏まりました」とお受けの言葉につれ、今までの百姓言葉と打つて變つて
大喝一聲「代官、頭が高い控へッ」「エツ、ハ、ハ、ハ……」

ビク／＼もので居つた代官、助三郎の聲に驚いて一二間後の方へサツと飛びしさり、地上に兩手を支へて平伏した。

「如何にも是れにお在になるは其方推察の通り水戸光圀卿である」「ハイッ、某しは當地の代官政木藤馬と申す者、誠に存ぜぬことゝは申せ存外の御無禮平にお宥しのほご願ひ上奉まつりまする」「イヤ／＼夫れには及ばぬ、が當所を支配致す者さあれば申し聞す儀がある」「ハイッ……」「此度のこそ、元より予が召し連れたるものに於ても宜しく無いとは云へ、聞き及ぶに彼れなる神官は常々高歩の金子を貸付け、其取り立ては鬼にも等しき所行をなすさか、只今ですら宜しくは思はぬ職業を神佛に仕へべき身を以て致すとは實以て論外の至り、又た只今とても是れなる者の言葉に無禮の廉ありしを奇貨とし、祈禱料として五兩の金子を奪ひ取らんさせし所業是れとても奇怪至極の儀である」「ハイッ、誠に恐れ入りましたる次第……」「なれども此度の予は微行であれ

ば忘れて取らす、以來は其方より殿しく取締るよう」「ハイッ、畏まりましたござりまする、就きましては彼れなる神官、如何ように計ひませう」「イヤ／＼、此度は忘れて取らす、繩を解いて遣はせ」「ハイッ……」

是れで神官は漸く縛しめだけは助かつたがお蔭で顔中は毛虫に刺されて丸で天刑病人のよつになつてワン／＼云ふて居る、けれども相手は光圀卿と聞ては黙言で呻吟て居るはけにはゆかね、腰を抜かさんばかりに驚きながら痛みを堪へてさま／＼にお詫を申し上げた。

其内に代官からの注進によつて城内からはお迎への人数が出張する、光圀卿はこれにいろ／＼と御辭退になつたが強つてこのことで御入城になり、采女正殿に久々で御對面あつて此處で兩三日御滞在、夫れから又もや西に向つて御出立になられた。

○大金とは僅かに二十兩

明石を御出立になられた光圀卿の御一行は先づ曾根の松から高砂の松、夫れから石の寶殿なぞ播州名所を夫れく御覽になつて御着へお着きになられたのは其日の七時半時、今五時頃、此處から姫路までは一里ばかりの道程であるから云ふのでエルく御休憩になつて聽てお出掛けになられたのは日も次第に西に沈もうとする頃となつた。

がお氣が向けば夜道は少しも苦にせられぬ御氣性、御着を放れてダンく歩み運ばれて居るさお供の萬五郎俄かに思ひ出したように云ふ「モシ御隠居様一寸御覽なさいませ先方の芝の上に休んで居る奴がございませう」「フムく彼れは旅商人じや無いか」「へエく一寸見ればそうでございませうが彼れは油斷が出来ませんぜ」「ホー、何うして」「へエ、今頃優良に休んで居るの

は可訝いと思ひましたので、ヨクく氣を付けて見ますと此方を見ては何か相圖を致して居ります。「相圖をして居れば何じや」「へい、い、まアく云はすさ知れた追落してございませう」「追い落し……夫れは久しぶりじや、なア助さん格さん、彼れは追落しじやとよ、何うじや面白くは無いか」「左様でございませ併し御隠居様、彼奴は事によるさお氣を付けんと險存でございませう」「ホー、そりや又た何故じや、萬五郎は彼奴を知つて居るのか」「イエ、此邊の奴に知つたものにはございませんか彼ア云ふ風体をして此方から行くのを待ち構へて居る奴は時によりませ飛道具なぞを持つて居るものでございませ、尤も御兩士共にお腕にかけては充分ではございませうけれども不意に飛道具ぞでやられた日には輕くても少しは傷をつきませう」「如何さま、して飛道具と云へば種ヶ島のようなものでも持つて居るだらうか」「真逆そんな氣の利いたものはございませまいが、まアく半弓が悪くすると變なところに綱を張つ

て居るかも知れません」「ハイ、ハイ、左様か、何うじや助さん格さん聞きま
したか、何うしよう」

飛道具の二挺や三挺にピクともする兩士では無いと兼て御承知の光圀卿は
あるが態をお話しはあがあるが少しもお氣味の悪いような風体は無く笑ひながらド
ン／＼お進みになる、すると佐々木、握美の兩士も又た「何うも困りましたな
ア……」と口では云ふもの、是れもニツコリ笑つて少しも變つた様子も無いが
ら萬五郎は少々薄氣味はよく無いが其後へ仕方無しについていつた。

其内に距離は次第は近くなるにつれ光圀卿はお供の面々に向はれ御自分の云
ひ付けるまでは一切手の下さぬよう、且つは何事によらず云ひ付け通り行なふ
よう堅くお命じになられたが、いよく其處まで趣かれると殊更ら一同の休
んで居る様を眺めながらサモ氣味惡氣にお通り越しにならうとする、此時ま
でシロ／＼此方の様を眺め居つた旅商人風の者等、互ひに何事が目で知ら

したと見る間に其内の一人スツクと立ち上つて「モシ旅の御人、何處からお越
してございます、今晚は定めて姫路泊りでございませうが姫路は是れから半道
もございますまいから一服なさるかよろしふございませう、私共も矢張り姫
路まで参りますのですから御一緒にお供を致しませう」と云ふ聲は穩やかだが
ギロリと光らす目は中々一癖も二癖もあるように思はれた、光圀卿は是れを輕
くお受けになつて。

「ハイ、御親切は有り難うございませうが少々大金を持つてございませうの
で早く参りませぬと道中が無用心と聞て居りますからお先へ失禮を致しまする
「ナニ、大金をお持ちだと仰言いますか、夫れては尙更らのことでございます
ぜ、私共等の仲間御覺の通り六人も居りますから御一緒に行けばナニ何ん
な奴が來た處で恐れることは有りますものか、兎も角も一寸休んで行きなさら
がよい」「イヤ、休んで居る内に遅くなつては何うも心許なふ思ひます

から是れで御免を蒙ります」左様か、それでは強て止めはしません其代り大金だけは此方へ置いて行くが宜しふございませうぜ、万一途中で追ひ落しなぞに出會しては大變でせうから」滅相も無い、見づ知らずの貴郎に何うしてお預けは出来ませう、天れは真平ら御免を蒙むりませう」オイ、何んだ吐すんじや、真ツ平御免を蒙る……へい、お前の方で御免を蒙むるつもりでも已だちのほうでは蒙らさぬ筈だ、憚んながら是れでも此の街道筋では多少に知られた大哥さまだ、愚圖く云はずさッササと出すほろがお前の爲めだらうぜ」夫れではお前さんは矢ッ張り追ひ落しですな」ハ、ハ、ハ、ハ、云はずと知れたこちや、さア出すか、出されば辛い目を見ればなるまい……「オイ早くやつつけて仕舞はふ」オット合点だ……」先に立つた奴の言葉に應じて休んで居つた五人の仲間の者はバラく、飛び出すと、今までは密んで居つたか松の小影からはれも四五人の放、ヌツと牛身

を現はした手ん手に牛弓に矢を番へて狙ひを付けて居るものもあれば又た手拭の端に小石を包んでソリヤと云へば飛び出そうと待ち構へて居るものもある。光圀卿は是れを御覽になつて殊更ら驚いたように「アモシ、一寸お待ち下され、一体何うなさるおつもりでございます」知れたことだ、手前等の生命を貰ふのじや」生命を……そッ、そりや大變、何うか夫れだけはお助けを願ひます」望みがあれば助けなくても無い、其代り金は勿論、持ち物は悉皆渡すか何うも仕方ございませぬ、差し上げませう」ヨシ、それなれば助けてやるさア早く出せ」宜しふございます、さ、何うかお受け取りを……ですが裸体で道中は出来ませぬから衣服だけはお許し願ひます」兎も角も持ち物を此處へ出して見ろ」宜しふございます」光圀卿は帯をお解きになるさ懐中の紙入やら御守り刀まで地上に落ちた、是れをお差し出しになる「是れだけでございます」ドレ見せて見ろ……オヤ是

れは守刃だぞ、フトム中々立派な袋に入れてあるな、それから紙入……ナイ
 ンだ大金、さ大層らしく云ふ癖に僅か二十兩餘りしか入つて無いては無いか
 「さ、夫れが私しの爲には大金でございます」 「チヨツ、仕方無いな、では
 其方の若い、お前たちも懐中を出さんか」 「オ、助さん格さん、仕方が無
 い、金より生命が大切だからお前たちもお渡しするがよい、傷を付けられては
 取り返しが付かぬ、決して手向ひをするのではありませんぞ」
 兩士は馬鹿らしいと思ふたが光圀卿の仰せだから仕方が無い 「こんな奴は一
 捻りにするのは何んでも無いのに……」 口へは出さぬが咳きながら怨しそ
 うに差し出す 「私共は是れだけでございます」 「オ、此奴もチヨツコ守刀を
 持つて居るな、ドンノ、胴巻には何れほごある……エ、ツ、此奴ア大金を持
 つて居るなア、併について居る奴が是れだけ持つて居る處を見るさ老爺、お前
 はまだ、何處かに隠してあるに相違はあるまい」 「何うして、今お渡し

をした胸臆だけです」 「いんや、そんなことは無い筈じや、それでは多分着物
 の間へ縫い込んであるのに相違はあるまい、其着物も置いてゆけ」 「モシ、そ
 れはアンマリ殺生でございます、着物が無ければ何うすることも出来せんか
 ら是れだけはお助け」 「イヤ、それは不可ん、老爺だけでは無い一同の着物も
 脱いで行け」 「だつて夫れは餘り殺生でございます」 「云ふことを聞かれか仕
 方が無い、氣の毒ながら生命も一緒に貰ふから覺悟をしろ」 「ア、ちよツ、
 一寸待つて下され、仕方がありません夫れではお渡しをしませう、其代り襦袢
 だけは勘辨をして下され」 「ヨシ、襦袢くらいなれば許してやる、オ、若いの
 お前たちも早く脱んか」 「オ、助さん格さん萬五郎も仔方が無い脱いで渡しな
 さい、決して手を出しては不可ませんぞ」

○矢ッ張り只物では無い

泥棒共は光圀卿を初めお供の三名の衣類から持物悉皆を洒へて勝鬨あげんばかりにスタ／＼彼方へ立ち去る後を見送られた光圀卿、忽ちカラ／＼とお笑ひになつて「ハツ／＼／＼、泥棒に出逢ふのも随分骨の折れるものじやの併し御前、是れから何う遊ばすお考へてございます」「ハ、ハ、ハ、ハ、助三郎心配するな、是れからが細工じや」「恐れながら御前、誠に残念に心得まする、折角手許に近づきましたる悪漢を見す／＼お逃し遊ばしました計りか衣類所持の品まで……」「コレ／＼格之丞、其方までがそう云はずさよい、今に取り返してくれようから」「ハツ、して如何ように……」「フム、兎もあれ萬五郎」「へッ、大儀ながらお前に少々御苦勞にならねばならぬ」「へエ……」「實はなア、今の奴等を此の場で相手にした處が助三郎、格之丞の兩名さへあれば充分ではあるが夫れでは又た中に首尾よく逃げ失せるものもあつて又々旅人を困らすに相違は無い、夫れよりも彼奴等は是れから思ひ設けぬ仕事さ云ふ

ので何處かに尻を落ち付けて酒盛をするに相違はあるまいから、そいつを旨く突き止めて一人も残らず此方の手へ擱つてやらうと思ふ、就てはお前御苦勞だが是れからソツと後をつけて行く先を突きさめて貰ひたい」「ナツ／＼ナール程、是れは中々の御工風でございます、宜しい夫れでは一寸行つて参ります……が併し御隠居様、万一道が違つてはなりませんから是れから先に曲り道がございしましたならば假令畔道であらうさもお氣をお付け頂きたふございませぬ、万一私しの曲りました角でございませぬれば木切へ紙を結び付けて其辻へ堅く差し込んでをきますから」「フム、是れは面白いさころへ氣がついた、それではぬからぬよう頼むぞ」

萬五郎に胸を含めて先づお差し立てになり、御自身は兩士をお伴れになつてフラリ／＼と歩まれる内、さある畔道の角に打ち合せのような印が差してあつたから是れによつて、道を右に取り相も變らず歩まれて居るさ、彼方よりハタ

「さ、駈け付けたのは賊の手下と思ひの外萬五郎であつた。」
 「オ、萬五郎、何うじや解つたか」「ハッ、確に見さめましてございます」
 「オ、御苦勞、様子は何うであつた」「ハッ、仰せによりまして彼奴等の後を見へ隠れについて参ります此の少し先方の百姓家のような家へ遣入りました」「はてな……」「私も不審に思ひながらソツと様子を覗いて見ますと驚きました」「何かあつたか」「有りましたとも、前刻の奴等は大方土地の奴らしふございますぜ」「ナニ、土地の百姓か」「さ、そうらしでございます、尤も其内先程差圖をして居つたのは何うやら黒人で夫れから武士らしい奴はお頭然さ待ち構へて居りました」「ホ、ー、武士らしい奴……」「ハエ、一同の奴等は前刻の品を持つて歸りまして、メコ、頭を下げますと御苦勞であつたさか何んぞか申しながら脇のほうへ指圖を致しますと其座つて居る眞ん中へ火を起した七輪や酒徳利などを持ち運んで居りましたから多分今頃は一杯やりな

がら品物を分けて居りませう」「ア、そうか、そこまで見極めれば結構、それでに是れから案内をして下され」「ハエ、畏まりました」
 そこで萬五郎は先に立つて案内をしたのは成程見たところは普通の百姓屋と變りが無い、光圀卿にはソツと月の隙から御覽になるさ如何にも正面には立派な風体の一人の武士は座を構へ、其側には前刻の品々を置いて十二三人の百姓らしい者等と鶏肉かなんかで酒を飲んで居る。
 「成程、如何さま萬五郎の申す通りじや、夫れでは格之丞」「ハッ」「其方は表で張り番をして居るよう」「畏、ござりました」「万、逃げ出すものがあれば當て身を入れて差し支へが無い、兎も角生命に別條の無いよう一人も逃さず取り押さるよう」「ハ、ハッ、心得ましてございます」
 仰せによつて格之丞は門口で手具懸引いて待つて居る、一方光圀卿は助三郎、萬五郎の兩名をお隨へになり、ガタ、ガタ、と入口の戸を明けて「ハイ御免

モット御馳走がありませんか「へエ、直ぐ取り寄せますが夫れにしてもお頭は失禮ながら何んぞ云ふお名でございます、私しは、準の吉松と云へば多少は名の知られたものでございますがお頭のような度胸の据つた方に逢ふのは初めてでございます」「ハイ、ハイ、左様かな、兎も角もモ一杯頂戴しませう、コレ、助さん、お前も何うじや、シツカリ飲みなさらんか」「ハイ、……」

○泥棒の頭は土地の代官

光圀卿は吉松の言葉をよい加減にお聞きになりながらシロく、附近の様子を御覧になるさ上座に控へた武士は是れも氣味悪げに此方をシツと眺めて居る「時に吉松さん」「へエ、……」「彼の武士風の人ば彼れも矢張り仲間かな一寸見た處で中々立派な風体だが……」「へエ、お頭、彼の御人のおかげで

我れ、が安全に仕事が出来ますのです」「ホ、それでは腕でも少々利きますか」「ナイエ、腕よりも彼のお方が此邊のお頭でございますから我れ、は何んな仕事を致しました處で少しもお咎めを受けるようなことはございません」「是れは妙じや、それでは此邊は泥棒の繩張内になつて居るのかい、何處の土地にも代官と云ふものがある筈だが……」「へ、ハイ、ハイ、そうムキになつて仰言つちや差し支へますが彼の方こそ此邊のお代官様でございます」「ハイ、左様か、それではお代官が泥棒のお頭になつて居るのじやな、それなれば安心だ」「へ、ハイ、ハイ、ですからノンキに仕事をやつては居りますが併し同じ泥棒でも貴郎のような度胸のあるお頭は滅多にはございませぬ、兎も角もお名前を伺ひたいものでございます」「ヨシ、それでは名乗りませうが吃驚しなさんな」「へエ……そりや何うせ日本に名の響いたお頭と存じて居りますから」「フム、さゝころで彼のお武士は常はお代官でも今晚はお前さんたち

の頭だらうな」「左様でございます、得物は皆お代官様のお心次第で領けて頂
くのでございますからまあ、私し共に頭でございます」「左様か、それなれ
ばお前さんに名乗るのもよいが先づ乗に名乗り合ひをしよう」「へエ、ヤッ御
尤もでございます、何うも私しは差出すきまして申し譯ございませぬ」
吉松はビヨロ／＼頭を下けながら今度は武士の方に向いて。
「モシ御代官様、お聞きの通りでございますが一つお名乗り合ひをなすつちや
何うでございます、此のお爺さんは失張り察しの通り中々大泥棒のお頭らし
ふございますから何うせ何かの時には爲になるでございませう」「フム、そう
か、では吉松、此方へ案内をせい、コレ／＼、貴様等少し座を下れ」「へエ、
……」
側に居る奴等を追ひのけて光圀御の方に向ひ「ヤッ、頭ごやら、さ、斟酌
を致さず此方へ参るがよい」「ヤア、これはお代官でございますか、中々よいお

内職がございますなア」「コレ／＼、此處では餘り代官／＼と云はぬようし
て貰ひたい、兎も角此方は田代利部と云ふ者じや」「でございますが」「其方
は聞き及ぶ處、中々大したものであるそうなの」「ハ、ハ、ハ、ハ、マア、少
々ばかり……」「聞けば今晚の仕事は其方の所持の品であつたさか氣の毒なこ
さを致した、是れは無論返却を致すから改めて納められ」「ハ、ハ、ハ、ハ、左
様か、だが夫れでは一同のものも張合はございませぬ、マア、其方へ納め
て置いて下され」「ナニ、是れを納めろさか……フム、何うじや吉松、是れ
を貰つてをいても差支へは無からうか」「メツ、滅相な、そツ、そんなものを
取つてをいては大變でございます、外で何んな仕事でも致しますから夫れだけ
はお頭へお返し頂く方が宜しふございます、お頭、御立腹ではございませうか
何うか、何うかお納めを願ひます、オ、一同の奴等、何んでホカンさして居る
のじや、早くお頭へお詫をせんか」

一同の奴等は何れも吉松の言葉によつて詫を云ふ奴があれば又た中にはかまなく慄へる居る奴もある。

「ハ、ハ、ハ、ハ、それではまあ、貰つてをきませう、處で何うです大分仕事はありますかな」 「仕事と申した處で大したことは無い、夫れにしても其方は何んぞ名乗る者じや」 「私しの名前……が私しは一体何に見へます」 「云ふまでも無い日本國中で相當に名の知れた泥棒の頭では無いか」 「ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、見へますかな」 「ナニツ……」 「それは折角ながら少々見當が違つて居りませう」 「すれば何んだ……」 「ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、處でお前さんは代官に相違はあるまいな」 「エツ……」

代官の田代刑部は光圀卿の様子を漸次變つて來たので少々底氣味が悪くなつたか、側の刀をソロ／＼引き寄せた。

「セツ、全体其方は何んだ」 「ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、私しの名前は今に名乗るがお前

は代官に相違はあるまいな、夫れから手下として居るのは定めて土地の百姓衆だらう、此處は酒井殿の領分と思ふが雅樂守殿も宜い代官を持たれたものだ、領分内に天晴な百姓を持たれたのじや」 「コリヤツ、其方は全体何んだ、無禮者めツ、名を名乗れ」 「ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、それでは名乗つてやりませう吃驚したさんな」 「ナニツ……」 「助さん、一寸言ふてやりなさい、それから格之丞、コレ、表に居る格之丞、外の者は止めてをいてお前だけ一寸遣入つて下され」 「前刻來表にあつて月の隙から様子如何に覗いて居つた格之丞はお言葉によつてツカ／＼と遣入つてくるさ、佐々木助三郎はスツクと立ちあがつて代官を睨めつけた。

「代官田代刑部、頭が高ひ限れツ」 「ナツ、ナニツ……」 「是れにお在遊はすは恐れ多くも前中納言從三位水戸黄門光圀卿であるぞ」 「ケエツ……」 「無ツ、無禮者、下れツ」 「ハ、ハ、ハ、ハ、ハ……」

晴天の霹靂と云はふか意外な言葉に代官は勿論吉姓も又一同の奴等もバ
タリと早腰を抜かして青くなつて居る。光圀卿は此の様を御覽になつて殿然と
威儀を正された。

「是りや刑部さやら、一郷の首領ともなるべき身分を以て何たることである、
夜盗奸賊を取り締るべき役目に居りながら自ら夫れを行ひ良民を誑かし旅人を
苦しめるさは不埒千万なる所業、何んたる心得違ひじや」「ハ、ハ、ハ、何んとも
ちまして……」「餘の儀なれば兎も角、あるまじき悪くき致し方、それッ縛り
あけい」「ハ、ハ、ハ……」

格之丞は早速飛びかゝつて用意のしてあつた荒縛で何んの苦も無く刑部を縛
りあげるさ傍へに居つた吉松は此の暇にバツと逃げ出そうとする處を是れは助
三郎引ッ捕へた、するさ他の奴等は大抵は腰を抜かして立ち上ることは出来な
んだが中には素速く駆け出ようとするものもあつたのを氣轉の利いた萬五郎、

門口へ大の字張つて立ち上り「逃げる奴は片ツ端から生命は無いがら其覺悟を
さらせ、斯く云ふは水戸御隠居様のお付きの者、龍宮の萬五郎だ一疋や二疋は
捨り潰すに譯は無いぞ」と大威張りに威張つたから既に荒膽を抜かれた百姓等
は何んのことは無い海月が海鼠のようにグニヤ／＼となつて縮み上つて居るば
かりであつた。

○大變なカン違ひ

光圀卿は是れ等の様を御覽になり、代官と吉松だけを側へに撃かせブル／＼
もので震ふて居る百姓等を元の座へ無理に集まらせ、總てお尋ねになられる。
其方等は身受くる處、何れも此邊の百姓共と思ふが、如何よりの次第から泥
棒の仲間入りとなつた、次第によれば助け得させんでも無い、詳しく語つて聞
せい」「ドツ、何うもはや御申し譯はございません」「謠はせずともよい、兎

もあれ詳しく語つて聞せい、土地の百姓の身を以て其土地にて宜らぬことを致すのみか頭に代官を頂くところを見れば何れは代官の云ひ付けさと思ふが何うじや」「へッ、實はその……實はお察しの通りでございますフム、正道に百姓を致し居るさても其日のことには缺くまいと思ふが何うじや」「そッ、そのほうが反つて氣樂ではございますが何分にもその……お代官様の云ひ付けでございますものですから……」「ナニ、代官の云ひ付けださか……」「へエ……その……在所の爲めと申しますことで……」「コレ、毎晩街道筋に泥棒が出るさ云へば村は淋しくこそなれ村の爲めにはなる筈は無いで無いか」「處がその……在所を常々から金持にしてをかねば饑饉年には困るであらうから毎日在所のものが代る、街道筋へ出て仕事をしろさのお云ひ付けでございます」「ホ、ー、是れは妙なことを聞く、それでは在所の人は誰れも彼れも此んな仕事をしろのか」「左様でございます、彼の吉松と云ふ人がお師匠さんにな

つて……」「ホ、ー、それは何日頃からやつて居る」「へエ、彼れ是れ半年ばかりにもなると思ひます、兎に角吉松さんがお代官のお邸へ來られてから此の方でございますから……」「フーム、して其仕事をした品物は何うする、定めて其方等も預けて貰つて居るであらう」「イエ、それは悉皆お代官の方へお預かり頂だいて私達は少し纏まつた仕事のある時だけは斯うやつて一杯の酒を飲むくらいのことでございます」「ハ、ー、それでやつたらぬじや無いか危ない仕事をして相手によれば生命を捨てねばならぬのに其報酬は酒の一杯や二杯飲んだところで何うなる、だが其預つて貰ふ品は何れは在所のものになる約束か」「そのまでは話しも定めて居りませんが、万一お言葉に従はぬ時にはお咎めがございしますので……」「いよく判らん、宜いことをしろさ云ふお言葉に従はぬ時にこそお咎めを受けるのは當然だが、悪いことをしろさ云ふお言葉に従はぬ時にはお咎めがあるさは初耳じや、巨處の國だつてそんな無

茶はお布令があるものか」「處が現に夫れが爲め此處の以前のお庄屋様は夫れが爲めト〜打ち首に逢ひました」「ナニ夫れが爲め打ち首……」「へエ、それが爲め云ふ譯ではございませんが、お代官へお諫めをしたのが元になりましてツマラヌお咎めから打ち首にせられましたのでございます」「それはいよく、怪しからぬ、全体こんなことは眞面目な人間のすることでは無い、其方達も百姓さ云ふ立派な仕事があるのじやからこれからすつかり改心をして眞誠の人間になるがよい、若し其内に饑饉年にもあへば領地の殿様からお助ひを下さるるようにつつても取らせよう、悪には必ず悪の報ひがあるものじや、正直の頭に神宿るさ昔から云ふ通り人間は人に迷惑をかけず正直にして居る程越したことは無い、が夫れさも相變らず今までのようなことをやるつもりか何うじや」「めツ、減相な、第一人様のもを只取るさ云ふことから好きませんのです、が、ついその……お代官が……」「夫れでは今後はよく〜心を入れ換へ

て自分の仕事を勤むよう心掛るがよい、さすれば此度のことは許して進ぜる」「エツ、ではお許し下されますか、何うもはや有り難ふ存じます」一同の奴等は非常な悦びでお辭儀やら平駄張つたのやら判らぬように禮を述べ、それから縛つた代官と吉松を殿しく御詮議に相成るさ、吉松は前々から道中を稼いで居つた誤魔の灰であつたがフト代官の手に捕へられた、處か此の田代刑部と云ふ奴は随分さ慾の清くない性質であるさころへ吉松は辨に任している〜さ云ひぬけをした刺さへ、旨く代官を丸めこんで仲間に取り入れ今までの咎人は忽ち代官の顧問となつて大仕掛の泥棒屋を開業に及んだ、先づ近郷の百姓等を代官の威光によつて手下につけ、代官自ら頭となつて仕事を初めたのであるから役人に捕まへられる恐れは無い、天下……さば不可ぬが此の近郷御免の泥棒となつたので仕事は仕放題、従つて買入りは夥しく無く、代官の祿高以上にツン〜収入はある、是れが爲め刑部は大に悦んで無暗矢鱈と泥

棒業の發展に及んで居つた云ふことが判つた。

是れで光圀卿には非常の御立腹、其場で兩名の首を打ち落させ、是れを街道筋の松並木のところへ梟首に曝し、障子へペタ／＼と次きのように記されて其側へ置かれた。

一、當所の代官田代刑部なるもの其身分を忘れ悪漢吉松なるもの共謀して土地の良民を使讞し此地通行の者に迷惑を掛け夜盗に等しき所業に及びし段不埒至極に付き此處に七日の間獄門として曝し置くもの也。

水隠梅里

「斯ふしてをけばよからう、何うも思はぬことで大分遅くなつた、是れから姫路までは道程も遠くはあるまいから早く行きませぬ」とあつて例の三名を随かへられ、お急ぎになつて漸く姫路へお着きになられたのは早仕舞の店は戸も閉

て居ると云ふ四ツ過ぎ時、今の時間で十時過ぎ、彼方此方と宿をお探しになつて兎も角もお泊りになつたのは場末の餘り立派では無い道者宿であつた。

話し代つて御着の近在の者は大騒動を初めた「ドツ、何うも大變なこゝになつた」つされば、尤もお代官様は宜くは無いが首をチョン切られたとあつては此まゝには捨てをけぬ、併し相手が水戸の殿様とはドーモ思ひも寄らぬこつちや」「そうだ、こつちにしたところで御家老様のほうへお知らせをせればなるまい」「フム、だが水戸の殿様は何處へ行きやしやつたらう」「代官様と吉松さんの首を持つて街道の方へ行かれたと思ふが、何分にも怖かないから後も見なんだぞなぞ」さカヤ／＼評議を初めた末、取り敢へず姫路の家老、赤城久馬の許へ其事を知らした。

水戸の豪い方お越じや

家老の久馬に於ては全く寢耳に水同様の驚き、代官の殺されたのは自業自得にした處で水戸の御老公が此邊へお越しにならうとは夢にも思はぬこと「水府の御老公には諸國御漫遊さばかねく承まはり居れど當國へ御越になられたごは意外千万、夫れに致せ今宵御着より何れへか御出立なられたごあれば當御城下に御宿を定められしは必定、是れは此ま、捨てをくわけには相成らぬ」さあつて夜中ながらも俄かに仕度を調べて登城に相成り主君酒井雅樂頭事へ其由を言上する、雅樂預殿に於ても是れまた思はぬことであるから「ナニ、水府御老公には此度當地へ御入國さか、夫れは寸時も捨てをく譯には相成らぬ、早々に御宿を尋ねご當城へ、案内致すよう計へ」「ハハッ、畏まりました」
そこで久馬は早速諸士に命を傳へて城下の宿屋と云ふ宿屋を片ツ端から探さすこととなつた、其内にも酒井侯に至つて短氣な方であるから自ら下知を傳へて城内を掃除さす、ブラ／＼して居る家臣が目につくこと「コリヤ／＼、其方も

早速参つて城下の宿々をお尋ね申せ、万一水府公御在宿さあれば直様當城内へ御案内を致すめじや」「ハハッ……」
家臣は面喰はんばかりに慌て、飛び出すけ何分にも水府公を聞たゞけであるから水戸の御前さあれば定めて一流の旅籠屋にお泊りになつて居られるに相違はあるまいと云ふ考へから立派な宿屋のみを尋ねるが元より判る筈は無い、仕方無いからスゴ／＼引ツ返して其旨を言上するさ候には大變な立腹「馬鹿ッ方が無いからスゴ／＼引ツ返して其旨を言上するさ候には大變な立腹「馬鹿ッ城下の宿を片ツ端から尋ねたごころで知れた筈だ、何れかにお在にならぬ筈は無い、今一度参れ」「ツハッ……」さ又もや飛び出してはウロ／＼して居るばかり、是れが爲め姫路の城下は俄かに灯提の燈火が行き交ふて居るので知らぬものは「オヤッ何んだらう、是りや可訝しい、赤穂の二の前じや無からうか」「赤穂の二の前さは何んだ」「馬鹿ッ、赤穂の二の前を知らぬか、それ頃は元禄十四年……と云ふ口よ、ひよつとすると江戸から早打ちでも來たのかも知れ

ぬぜ」「だつて此城の殿様は今お國にあるからそんなことはあるまい」「それもそうだなア」なぞと云ふものさへある。

光圀卿にはお宿へお着きになつて遅々ながら御夕飯も済まされ、是れからお寢みにならふさせられるさ何んだか表が騒々しいので二階の格子からソツと御覽になるさ酒井家の定紋打つた灯提が彼方此方へ忙がしげに走つて居る、心中に不審があれば是れをお訊しになられば氣の済まれぬ御氣性であるだけ兎も角も亭主と呼ばれた。

「オ、御亭主、遅々お氣の毒でございます」「何う仕つりまして、何が御用でございますか」「さア、別に用さ云ふのではございませぬが一寸お尋ねしたいこともございましてなア」「でございませぬか、何んなことでございませぬか」「外でもございませぬが表がアンマリ騒々しいので一寸覗いて見ますと何んだかお侍ひが忙がしそうに往き來さして居ります様子、何事が起つたのでございま

すか」「へエ、そのことでございませぬか、それにつきまして只今私しの方へも御家中の方がお見へになりましたが、何んでも水戸の豪いお方が今晚此方へお越しになられたそうでございませぬか」「ナニ、水戸の豪いお方、ホ、それは何んな人でございませぬか」「さア、確さは聞きませぬが將軍様のお次ぎに座るくらいの方やそうで……左様、何んでも酔入りの牛旁粉さか申して居りました、私しの方へお泊りになつてないかさお尋ねはございましたけれども夫れほどの方は何うして私しのような處へお泊り頂だけますものかさ申し上げますと其ま、お歸りになりましたとございませぬか」「ハ、ハ、ハ、左様か、するさ水戸の御老公が此地へ來られたので其宿を探して居るさ云ふのですな」「スイフのゴローコー……左様、酔入りじや無いスイフ、貴様はよく、御存じですなア」「夫れは私しの國は常陸でございますから……」「ナツ、ナール程、ですがお客様、何うでせう其スイフさ云ふ方を夜通しかつても探され

ばならぬさホト／＼云ふて居りますがお待ちは常は威張つて居りましても此んな時にはお氣の毒ではございせんか」「夜通して……ホー、それは又た何故でございませう、眞逆其人は此處の殿様の仇敵ではございませう……」「さ、元よりそんなことはございせんが大きな聲では申しませんけれどもお殿様は至つて癪癖の強い方でございませうから一旦仰させ出された事は何うしても仕遂げぬとお氣が濟まれぬそうでございませう、それで今晚も何誰様が首尾よう其スーフ様をお尋ねすればよろしふございませうが万一反らんと云ふようなことが有つて御ろうじませ只では濟みませんぜ」「それは又た何うして……」「申す迄も無い御立腹の餘りでございませう、悪くすると御勘氣、輕くて閉門でも仰せ付けられるような方もございませう」「そりやお氣の毒でございませうア、ですが知れぬ時には方がありますまい」「さ、そりやそうでございませうが、殿様の御氣質としては僅か御城下内に居る御人を探ることが出来ぬよう

は万一の時には何うするさ云ふようなことでございませう、現に先年も御馬が御處かへ失つた時にも夫れでございませう、それが爲めお馬奉行か御勘氣を蒙むる處であつたのをヤツと探し當たので漸ふ御機嫌が直つたと申すことでございませう、お馬ですら夫れくらいでございませうに今度は豪いお方を探すのでございませう、さすれば夫れくらいのことには當然でございませう、それですから皆様が血眼になつて駈け廻つて居られます」「ホー、それは何うも短氣な殿様でございませう、夫れだけ聞けば澤山、何うも態々呼びよせてお氣の毒でございませう」「何う仕つりまして、左様なればゆるりとお寝みなさいませ」亭主は下へ降りて行くさ光圀卿には其後をお見送りになり「なア助さん、雅樂頭も相變らず短氣には困つたものじや、今の話しによるさ捨てなけば又た誰れか酷い目に逢はすはなるまい、一寸尋ねて行きませう」「ハ、ツ、恐れながら最早夜も餘程更けて、ござりますれば明朝ゆる／＼遊ばしては如何にござ

「りますか」「さ、なれども家中の者がまだ彼の通りに走り廻つて居るのを見ては安閑と寝んで居るわけにはゆくまい」「恐れ入りましたる御言葉、夫れでは萬五郎なりともお遣はしになり取り敢へず今宵は此處に御一泊のこそを御通知遊ばされるが宜しからうと心得まする」「如何さま夫れがよからう、では萬五郎」「へエ……」「お前大儀ではあるが一寸行つて下され宜しふございます、御城内へ参りまするか」「イヤ、夫れでは宜しく無い、手紙を認めるから家老の邸まで参つてくれ」「畏まりました」

○夫れが即ち御短氣と云ふもの

姫路の城内では大守雅樂頭 次第に夜の更けるも厭はず側に家老赤城久馬を

控へさせて相變らず待ちかたて居る。

「久馬」「ハ、ハ、ハ」「まだか」「左様でございます、何うも……」「怪しからぬの、一同手分を致し城下を残りす尋ねることも最早知ればならぬ筈、一同の者は何を致して居るであらう」「ハ、ハ、ハ、恐れながら皆の者を遣はしましてまだ半時にも相成りませれば今暫らく御猶豫を……」「ナニ、まだ半時にもならぬさか、フーム、待つ間は長い」「御意にござりまする」

是れでヤツと其場は治まつて居ると暫らくあつて「久馬……」「ハ、ハ、ハ……」「一同の者は何を致して居るであらう、段早判らねばならぬ筈じやが」「御言葉にはござりますれど一同が立出まして漸く半時ばかりでござりますれば今暫らく御猶豫を……」「まだ漸く半時さか、待つ間は長いのだ」「ハ、ハ、ハ……」「すむと間も無く「久馬……まだか……」「と尋ねるので久馬もいよく持て餘して居る 其内に額の方へはホツ／＼痲痺のデツテルたる尊菜のような筋が

現はれ始める、是れを見ては久馬ばかりか其他の近侍まで縮みあがらんばかりと見る。今度は痛聲を一段と高めて「久馬……」「ハハハ……」「予の家來に便りをするものは一人も無いの」「恐れ入りまする」「此上は餘人を頼むには足らぬ、其方大儀ながら探れて参れ」「ハハハ……」

「さア久馬は弱つた、如何に家老だからと云ふても鬼神でも無ければ千里眼も持つては居らぬ、澤山な諸士が探れても判らぬものが久馬の方で判る筈が無いと云ふて殿の命があれば仕方がないから濫々お受けをして立出ようとする支關先へ駆け付けたのは自分の邸から急ぎの使ひ、何事だらうと持つて来た手紙を見るに紛れも無い光圀卿からの御書面であつたので夢かさばかり悦んで再び奥殿へ駆け入つた。

「ハハハ、恐れながら申し上げます」「オ、久馬、何んとした、水府公の御在所は判つたか」「ハハハ、只今仰せにより立ち出ます折柄、御支關先にて某

し邸よりの使ひに出逢ひましたる處、水府御老公よりの御書翰持参致しましてござりまする」「ナニ、水府公よりの書翰……」「ハハハ、何卒御覽のほど願はしふ存じまする」「フム、是れへ持て」「ハハハ……」

酒井侯は久馬の恐るゝ差し出す御書面を急いで抜いて見ると御筆の跡もあざやかに

此度俄かに中國筋の漫遊を思ひ立ち只今城下外れまで着取り政へす假りの宿りを求め候、久々にて雅樂頭殿に頭對顔致したくばあれど何分にも微行のこさなれば態さ差し控へ書面を以て申し通じ候、此儀雅樂頭殿まで宜しく傳へられたく候且つ雅樂頭殿性來の短氣今に變らざる趣き一城の主たる人には惜しき事に候、くれぐれも家臣に憐みを加へ百姓町人を憫られるよう其許より通じられたく候

水 隱 梅 里

尚々雅樂頭殿には今宵家臣を八方に差し遣はされ殿しくお尋ねの厚意
 賜しくばあれど反つて迷惑にも相成れば是れ又た堅く御無用にせられたし
 「フム……すれば水府公には一同のものに探れさせ居ること御存じさ見ゆる
 の」「御意にござりまする」「して城下外れさは何れに居られる其方に心當
 りはあるまいか」「ハッ……恐れながら御城下外れさば御老公の御口實さ存じ
 まする」「ナニツ……」「今宵一同の者は御城下をのみ探れをりますれば御老
 公御城下外れに御在宿さござりますれば決してお氣の付かるゝ答はござりませ
 ん」「フム、では矢張り城下に居られるさか、すれば一同の者何故探し當る
 ことは出来ぬ」「恐れながら仰せにはござりますれど是れなる御書面の通り御
 老公には反つて御迷惑に思召され、特にお忍びのこゝと心得ますれば此上の御
 詮索御見合せのほど然るべきかと存じまする」「フム、なれども予が城下まで
 越されて御對顔を得ぬは残念じやのオ」「御意にござりまする、なれども水府

公思召に強て脊くも如何ぞ存じますれば御儀お見合せのほど然るべきかと
 存じまする」「如何さま……夫れにつけ予左程はまで短氣さあるか」「ハッ
 恐れ入りまする」「水府公の御耳にすら入るほどであればよくくであらう、
 此後は予も改むるであらうが若し其方の目に止るようの儀があれば遠慮なく申
 し出でくれるよう」「ハッ、有難き御言葉、恐れながら夫れでこそ天ツ晴れ
 なる御城主さ存じ奉つりまする」「夫れに致せ一同の者は未だ歸らぬさか、城
 下内に居られる御人すら探し得ぬさは臆甲斐の無きにも程のある、若し其まゝ
 立ち歸らば殿しく取り訊すよう」「ハッ、御意にはござりますれど只今仰せの
 御短氣さは其御儀にはござりまする、殊に水府公御書翰中、家臣に……」
 「フム、イヤ、是れは予の過ちであつた、今後は慎しむぞよ」「恐れ入ります
 る」

血氣の壯年さは云へ流石に明主と呼ばれた雅樂頭だけに光園卿の御書面だけ

で是れまでの性格はスツカリ代つて無暗と短氣を起さぬようになつた、是れは光圀卿御漫遊中でも御書面の忠告として有名な話である。

○已れ敵の片破れ

さて光圀卿には其夜は姫路の旅籠屋に御一泊になられたが、万一酒井侯の家人に見付けられては五月蠅と思召されたので翌朝薄暗い内に御出立になつて暫らくの間は道中をお急きになられたから一里あまりも来て漸く夜が明け離れた

「まア、此處まで来れば大丈夫だらう、眞逆早朝から立たふさは思ふまいから是れからゆるく行かふ」と仰せられて相も變らず道々の風景を御覧になり別段急きもせず歩みを運ばれたが夫れから岡山近くまでは別に書くことも無い、あつたところて別に取り立て、云ふ程のことは無いから急行列車で飛

ばすこゝとする。

兎に角途中彼方此方へお立寄になつて漸く岡山の町が遙かに見へるさ云ふ處までお越しになられたのは姫路御出立の後、二日目の夕方であつた、入りが西の山へ次第に沈んでゆく折柄なので口には出さぬが互ひに道をお急ぎになられたが、其内光圀卿はフト御覧になるさ街道から少し側の野中に菰葺の小屋があつて其中から二十四五才の風体は乞食ではあるけれども何處さなしに人品卑しからぬ若者が此方をキツき見つめてをる。

是れをフイと御覧になられたまゝ何氣無き体で其處をお過ごしになられたが何うもお氣になられたさ見へ道の半丁ばかりも来るさ振り返つて再び是れを御覧になり、更らに萬五郎に向はれた。

「何うじや萬五郎、今のは見たが」「何んでございます」「彼の乞食小屋に居つた若者、お前は何んさ見る」「へエ、彼れてございますか、何うも只者で

「はございませんな」「フム、お前の目には何んさ見る、矢張り泥棒の仲間さでも思ふか」「左様でございます、目付きの凄い處は何うも油断は出来ませんが併し泥棒に致しましては目の付け處が違ひます」「ホー、何うして」「大抵道中を稼ぎますものは最初に通る人の顔色を見て夫れから足許、最後に懐中に目を付けるものに極つてをります、さ申すのは迂闊に飛び出しましては何んな目に逢ひますかも知れませんが先づ顔付きと足付を見るのでございます、是れだけ見ますれば此の人は油断のならぬ人が仕事の仕易い人が判ります、是れだけ見定めまして次きに肝腎の懐中の重さを計るのでございますが彼の乞食は我れ／＼の顔を見た切りで足許も懐中を見ぬところから考へますと泥棒ではございません、キツと尋ね人があるか又た何か大望を持って居る人に相違はございません」「そうか、では何うじや、一つ試して見る氣は無いか」「試すとは何う云ふ風に致しますので」「外でも無い、彼の小屋へ乗り込んで腕前を試

して見るのじや」「じよッ、冗談じやございません、彼んな汚い處へ……」「ハイ、ハイ」
光圀卿はお笑ひになられたが聽て何かお考へになられた様で。
「兎も角乞食とあれば少々の金を悪んで見い」「まッ、又た戻るのでございませるか」「そうじや、其上で斯様／＼に致して見い、よいか」「へエ……」
何事かお命じになられると萬五郎は不精無精に引ッ返す、其後を光圀卿初め兩土もアラ／＼とお戻りになられた。
其内に萬五郎は早くも乞食小屋の處まで進んで幾らかのお金を若者の前へ抜けて「オイお菰、是れをあげよう」「ハイ／＼是れは有り難ふ存じまする」「こころでお菰、お前は只のお菰では無からうな」「そりや腹からの乞食ではございませぬ、昔は少々の財産、ございしましたが若氣の誤まりから放蕩を致しましたため……」「オイ／＼、詐もよい加減にするがよいぜ、誰れが腹からの

家にあつて一刀流と起刀流の達人、暫らく遇ふて居る内に隙を見透した助三郎
ツツと付け入つて利腕をポンと打つと「残念ッ……」と云ふ聲につれ持つたる
刀をカラリと落す。と續いで飛び込んだ格之丞、是れ又た其利腕を取り肩に
擔いで物の見事に投げ付けて起しも立てず上からグツト組み敷いた。
「ハハッ、如何計らひませう」「コレ〜、手荒なことを致しては相成らぬ……
コレ〜若者、決して心配致すには及ばぬ、其方は何か大望のあるものさ心得、
夫れを聞き訊さん爲めに試したまでのこと、次第によれば力もなつて得
させる、助さん予の名を聞いてやるがよろしい」「ハハッ……夫れなる御人、
よく聞かれ、是れにお在になるは恐れ多くも天下の副將軍水戸黄門光圀卿
であるぞ」「エ、ッ……」
若者は吃驚して平伏しようとするが格之丞に嚴しく押へられて居るから夫れ
も適はぬ。

「コレ〜格さん、放してやるが宜しい」「ハハッ……」と漸く格之丞は其手
を放す。若者は一二間飛び退つた平伏した。
「ハハッ、尊き御前の御家臣も存ぜず存外の御無禮、幾重にもお許しのほど
願ひ上げ奉つりまする」「イヤ〜、罪は畢竟此方にある、其方を試さん爲
めに餘りに悪戯が過ぎたに外ならむ、定めて其方も驚いたであらう」「恐れ入
りまする」「就いては今聞き及べば敵の片破さやら申したが其方は敵を持つ身
か」「ハハッ、御意の通り三年以來父の敵を附け狙ひ居りまする」「さて〜
感心なる心掛、何れの藩士にて如何なる仔細によつて敵を持つ身と相成つた
又た其目さす敵の行衛は最早相角つたか詳しく語つて聞せい、次第によつて力
も成つて取られせ」「ハハッ、辱けなき御言葉、お尋ねにより申し上げます
る……さ語り出したのを詳しく書けば後が支へて居るから是れも急行列車で
搦り摘んで記せば次ぎの通りである。

此の若者は讃州高松の松平家の臣、五百石を頂戴して居つた柔道、指籠渡邊嘉門の、悴源十郎と云ふもので、今より三年前、嘉門は同藩の剣道指南番石塚三之丞と云ふ者の爲め武道の遺恨から討ち果され、三之丞は其場から逐電したので源十郎は早速主君に敵討のお許しを受け弟の源吾と云ふものと共に高松を出立して諸國を廻る内、因州鳥取の池田侯に敵三之丞は石田三兵衛を名前を變へ仕官して居ると聞いてはるゝ出掛けて行き、乞食の風体となつて敵の様子を探る内、或日源十郎の他行の留守中小屋に残してあつた源吾は何者にか切り殺されて無残の最後を遂げたが、其際附近に居つた云ふ乞食によく聞いて見ると何うやら三之丞の仕業らしく覺へる、それで一層憤慨して折あらばさいよく油断なく狙ふて居ると敵も其事を察して自分で轉じたか又た主君の計らひか同じ池田侯の一統内である此の岡山の池田侯へ何日の間にか仕へて居ると云ふことか判つた。

それで半月ばかり以前に當地へ來つて様子を窺ふて居るが中々辨口に長けて居るので旨く主君に取り入つた爲めが大層お氣に入りの様子、殊に少しも油断が無いので残念ながら目の前に敵を置きながら今に望みを果たすことは出来なくて居る。處へ今晚萬五郎が突然其小屋を覗いて意味あり氣な言葉さかけたからさては何者かに云ひ付けて弟の源吾同様、自分を討ち果さしに來たものと考へ思はぬ無禮をしたのであると云ふことであつた。

○云ふことを聞かねば家を焼くぞ

光隨卿は源十郎の云ふ處を一々お聞き取りになり、且つは高松の大守から下け渡されたと云ふ敵討ちの許可状を御覽になつて非常に感心せられた。

「三年の間の苦心は察する、殊に弟源吾とやらまで敵の爲めに討たれたさあつては無殘念であらう、が併し源十郎、其石塚とやらは確と岡山に居るには相

違あるまいな」「御意にござりまする、尤も姓名は石田三兵衛とござります」
「フム夫れでは心配を致すな予が万事計ふて取らせる」「ハハッ、辱けなく
存じ奉つりまする、何分にも宜しくお取りなし頂だけますれば此上の悦びはご
ざりませぬ」「フム、予も今宵は岡山に宿を求めの筈であれば其方も同道致す
がよからう……それにしても其風体にては宜しくあるまい……はて……フム、
萬五郎」「ハエ……」「お前は着換の衣類を持つて居るであらう此者の貸して
遣はせ」「ハエ……」

萬五郎は振り分け荷物の内から取り出そうとするのを源十郎は押し止めた。
「ハハッ、お志ざしは有難く存じまするが某しも斯様な風体こそ致せ着代の
衣類はござりますれば夫れには及びませぬ」「オ、夫れでは早速着代へるがよ
からう」「ハハッ……」

そこで源十郎は小屋の片隅から風呂敷包みを取り出して着代へる立派な武

士風となつた。

「ホ、一、中々立派になつた、處で源十郎」「ハッ」「其方に前以て申し置く
が、予の許すまでは水戸光圀と申すことを飽までも秘すように」「ハハッ」

「常陸の國の百姓光右衛門と云ふ事に致してをくから其目算で居るよう」「ハ
ハッ、畏まりました」「さア、それでは遅くならぬ内に出かけよう」さあつて
御一行に渡邊源十郎を加へて岡山の城下へお入りになり、京橋の橋詰、松屋卵
兵衛と云ふ旅籠屋へお泊りになることとなつた。

其夜は松屋で無事にお寝みになり、其翌朝になるさ光圀卿はお手紙を以て家
老池田支蕃へ其事を通じ池田侯へ申し傳へるよう計らはうさせられたが池田侯
の施毛が少々曲つて居るのがかれ、御存じの處へ三之丞はお氣に入りさなつ
て居るさ云ふことを源十郎からお聞きになつて居られるから少々お考へになら
れて「さてよ、是れは迂瀾に初めから予が名を出すべきは出来ぬ、予が尻押を

して居るさ云ふことが聞へたなれば或ひは折角の敵を逃さぬとも限らぬ、是れは順序を踏んで源十郎から先づ穩やかに願書を出さして様子を探つて見る方がよいかも知れぬ、其上で万一許されぬ時には何んさか方法を考へて予から申し聞けることにしよう、思召されたので先づ亭主の卯兵衛を呼んだ。
「へエ、何か御用でございますか」「フム、御亭主、少々お願ひがあるのです、が聞て下さりますまいか」「何う云ふ御用で……」「實は私達が此地へ参りましたのは少々公事がございますのじや」「へエ、」
「處が此地の勝手か一向知りませんから一つ此の願書を奉行所まで届けては下さるまいか、尤も失禮でてすが夫れに付いての御禮は致しますから」「へエ……併し何んな公事でございます……」「ナニニ、六かしいことはございませぬ、是れを奉行所へ差し出して下されば何んさかお言葉がある筈ですから夫れさへ伺ふて来て下さらば結構でございます」「左様でございますか、幸ひ奉行所には昵近のお役人

さんがございますから夫れでは何か存じませぬが一寸行つて見ませう」「何うかお願ひ致します、就ては是れはホンの僅かでございますが御手数料に收めて置いて下され」「でございますか、是れは何うも有り難ふ存じます」
亭主は何んにも知らんから光圀卿がお渡しになす幾らかの金子を悦んで懐中へ入れ、其まゝ立ち去つた。
光圀卿は亭主を奉行所へ遣はした後でいろ／＼其方法をお考へになつて居られたると晝もソート廻つたと思ふ頃、亭主の顔色變て馳せ戻つた。
「モシお客さん、貴郎方は大變な願ひをお出しになりましたな」「やツ、御苦勞、何うでしたお聞き届けになりましたか」「何うして、大層にお日玉を頂戴しました」「そりや妙じや、そんな筈ではございませぬが……」「貴郎は公事ござじやと手軽く仰言たので其つもりで参りました處が敵討ちじや、そうでございますな」「左様、敵討ちも公事と云へば公事でございますか

「お許しどころ
らな、ハ、ハ、ハ、ハ、併し何うでした、お許しが下りましたか」「お許しどころ
か滅法界に叱られました」「是りや妙じや、そんな答ではございませぬが」
「まア斯ふですお聞き下さい」

光圀卿の落付拂つて居るに引き代へ亭主は急ぎ込んで語り出す。

「私しは何んでも無いつもりで願書を差し出したのでございませう、處が何ん
ほ待つてもお呼び出しがございせんから昵近のお役人にお尋ねをしました、
するさヤツとの事でお呼び出しになつたので通りますと奉行さんはイキナリ卯
兵衛、此の願書は町役人が認めたかとお尋ねになりますから何氣無く、イーエ
夫れば私しの方に泊つて居る光右衛門と云ふ百姓が認めましたと申し上げまし
た」「ホ、ホ、ホ、するさ奉行さんは何んぞ云はれましたか」「是れからが大變
です、お奉行さんはクワツと私しをお睨みになつて御當家の御客人、殊に殿の
お氣に入りの石田三兵衛殿を敵なぞと申し立つるは不埒千万なるに光右衛門と

か申す者、百姓の分際を以て助太刀なぞは何事じや、斯様なものは一切お取
り上げには相成らんから左様心得い、尙念の爲め其方まで申し聞け置く、如何
に宿屋渡世とは申せ斯様なものを泊め置けば其方に於ても相當の處分を致す
により此旨確ご心得なくようさ丸ツ切り箸にも棒にもかゝらぬ御申し渡してご
ざいます、就きましてはお客さん、何うか早々御出立を願ひます」「ハ、ハ、ハ、
い、それは氣の毒でございました、ですが御亭主、正道に二つ無しさか申し
まして悪い奴なれば夫れはお叱りを受けるのが至當でございませぬが、敵を討た
ふさ云ふ、云はば孝行者を叱り付ける筈はございませぬ、夫れは奉行さんは
何か考へ違へをして居るのでございませう」「阿呆らしい、お奉行さんが何ん
で考へ違へをしますものか……兎も角夫れは何うあらうとも私しの方はお宿を
眞ツ平お断り致しますから何うか是れから御出立を願ひます」「イヤ、私しは
敵を討つまでは何うしても立ちませぬ、夫れさも強て出立しろと云ふのな

ればお前さんの家を焼き拂つた上で立ちませう」「メツ、滅相も無い、夫人な
ことをせられて堪りますものか……」

松屋の亭主は泣き出さんばかりになつてウロ／＼して居る。

○奉行さんが盗まれた

光卿卿はニコ／＼お笑ひになつて其様を御覽になり。

「ハ、ハ、ハ、ハ、御亭主、今のは冗談ですが今一度私しの頼みを聞いて下さらんか
「イヤモ一眞ッ平御免でございます、貴郎のお頼みはロクなことはございませ
んから」「ハ、ハ、ハ、ハ、今度は大丈夫、決して貴郎に迷惑を掛けるようなこと
はございませぬ、立てなれば是れを聞いて貰つた上で出立をしますから、夫れ
さもお嫌なれば何うです此家を焼き拂ひませうか」「メツ、滅相も無い……そ
れでお頼みさは何んです」「外でもございませぬ、今度は私しの方の若い者を

遣ります此地の勝手が知りませんから奉行所の表まで案内をしてやつて下さ
れ、其上でい／＼お許しが無ければ仕方ございませぬ、尤も御亭主は表まで
行つて下されば結構でございます」「へエ、それくらいなれば仕方ございませ
ん、参ることは参りますが見込はございませぬ」「それはモ一今度見込が無
かつたなれば私しも締めますから……」「それじゃ仕方ございませぬ御門前ま
で案内をませう」

そこで光卿卿は、佐々木、渥美の兩士に何事か御申し含めになり、松屋の亭
主を案内させて奉行所へ向はせた。

兩士は案内につれて道の十町ばかりも歩むと先に進んだ松屋の亭主卯兵衛は
立ち止つて一方を指さした。

「モシ、此處は奉行所でございます、左りの方は願ひ人の溜り所でございます
から其處へお這入りなさい、お役人が控へて居りますによつて夫れへお届けな

すれが取次いで下さいませ」「ア左様か、御苦勞であつた」
兩士は教へられるまゝ門を潜つたが左りの方へは行かないで支關へツン／＼
向つたから後見送つた卯兵衛、驚きながら「モシ、其處は違ひます左りですぞ
と聲を掛けて居るけれども聞へぬ体で支關先に突つたつて「頼む、く」と大
聲で吐鳴つて居る。

卯兵衛は此の体を見ていよく驚きながら逃げ歸つたが此方は一向平氣で代
る／＼吐鳴つて居るさ稍あつて出て來た取次、兩士の様を訝しそくに眺めて、
「其方等は何が願の筋でもあるが、然らば番所の方へ廻れ」「イヤ／＼、奉
行に聊かお話し致すべき筋あつて参つたるもの、何うかお取り次きに預りたい
「ナニツ……見受くる處、百姓さ心得るが」「其儀も奉行に對面致せば相判る
其許の知つたことではござらん、早々に取り次かれたい」「ヘーン……」
風体に似合はぬ言葉に取次の役人は氣を吞まれて奉行へ其由を告げるさ奉行

も解しかれるが兎もあれ對面所へ通せこのことに再び支關へ立ち戻つて兩士を
案内する、處へ稍あつて奉行は威儀を繕ひ現はれた。
此方は常所の町奉行栗田半兵衛である、其方は何れの何者であつて何等の用
あつて参つた」「ハツ、聊か御願ひの筋、且は御相談の儀あつて参りましたが
渥美氏、宜しふござるか」「オ、如何にも……」
云ふが早いか剛力の兩士、突然バツと飛びかゝつたさ見るまに格之丞は起倒
流の當身をツンと入れる、是れにアツと云ふて氣絶のした奉行を待ち構へた助
三郎は早速肩に引ツ摺いて表の方へタツ／＼と駈け出したから支關に
居つた侍ひなぞは吃驚して「それヤツ、奉行様が盗まれた」「奉行泥棒じや」
口々に叫きたてる内に行衛が解らなくなつたから俄かに大騒ぎを初めてなる。
話代つて松屋の二階では兩士を奉行所へ遣はされた後で光圀卿は源十郎と
萬五郎をお相手に何かさお話し、の處へ松屋の亭主は馳せ歸つた。

「モシお客さん」「オ、御亭主、御苦勞でございました、さア〜是れは妙ひ
 只今の案内料……」「へエ、ですがお客さん、只今の若い方は二人とも少々
 氣が違つて居りはしませんか」「ハ、ハ、ハ、何うして」「私しが今、奉行所の
 願ひ人溜り所まで教へてあげましたのに其方へは行かすお奉行様の玄關先へ大
 膽に行きましたぜ、先方は普通の人は滅多に行く處ではございませぬのに彼
 んな處へ行つてはキツとお咎めはございませう」「ハ、ハ、ハ、左様か」「モシ
 笑ひどころではございませぬ、さころで御出立は何うなります、先程の願書だ
 けですら殿しいお叱りを受けた處へ只今のよう二人は二人とも揃ふて彼んな
 ……」「まア〜宜しい、決して御亭主には御迷惑はかけませぬから……」
 「イヤ、前刻お奉行さまから彼れほど殿しく……」「まアさ心配せずとも宜し
 い、何んとか成りませう」「さ、其何んとか第一私しに氣に入りますので
 ……」「夫れではキツと御迷惑はかけませぬ」「イエ〜、貴郎等のキツとほ

とアテに出来ぬものはございませぬ、夫れよりもお奉行さんの……」「まアさ
 そう八釜しく云はずとも今に二人の者は歸つて來ませうから其上で何んとかな
 りませう」「さア夫れもアテには出来ませぬ、二人ともお咎めによつて夫れな
 りに揚屋へでも入れられたら何うなさる」「ハ、ハ、ハ、其處まで心配をして
 は際限はありますまい、まア〜宜しい」「イエ、夫れは不可ませぬ、貴郎は
 宜くても私しの方が……」
 光圀卿が仰言れば、仰言ほご云ひ募る亭主の言葉にホト〜持て餘して居る
 折柄、ドン〜と馳せ上つて來た兩人、其内にも助三郎は肩にして居つた氣絶
 して居る奉行をドツサリ其場へ下したから亭主の卯兵衛はいよ〜驚いた。
 「コツ、是りやお奉行さん……ヤツ、氣遣ひにも程のあつたもの……オツ、お
 奉行さんを殺して……」さ早腰を抜かして目ばかりパチ〜させて居る。
 光圀卿は其様を御覽になり「ハ、ハ、ハ、御亭主、心配せんでも宜しい、お

奉行は御用事が餘り澤山あるので草臥て休んで居るのでございませう」「そッ
そんな馬鹿らしいことがございすものか、貴郎方は揃ひも揃ふて無茶をする
にも程がある」「イヤ、全く寝んで居られるのです、なア格さん、御亭主
は彼の通りに云ふて居るから一寸起してあげなさい」「畏こまりました」
格之丞はツガ、奉行の側へ進んで後から抱き起し、ヤツと活を入れるさ
パチリと目を開いて呆れたように附近を見廻して居る。

○わらいこッちや〜

奉行は暫らくの間豆鐵砲を喰つた鳩のやうにキヨロ〜して居つたが聴
氣付いたかキツとなつた。

「コリヤツ無禮者、其方は何んだ」「ハ、ハ、ハ、漸やく氣が付きましたかな」
「ナニツ……」「まあ怒りなさんな、コレ〜助さん」「ハッ……」「私し

の名をメツと聞かしてやりなされ」「ハッ……コレ栗田殿とやら一寸耳をお貸
しなさい」「ナニツ……」「是れにお出でになるは……」と云ふた後は奉行の
耳の例に口を付けて光圀卿の御本名を云ひ聞すと今までの勢ひは何處へやら、
「ハ、ハ、ハ……」と飛び退つて兩手を支へ恭々しく平伏しながら何か云はふとす
るのを光圀卿は押し止め「コレ〜一切口外しては相成らぬ、當分の間は秘し
置よう」「ハ、ハ、ハ、ツ、畏まりました」とお受けをしたもの、ヒヨイと側を見る
と亭主の卯兵衛は呆れながら不作法にシロ〜眺めて居るから「コリヤ亭主」
「ヘエ……オツ、御奉行様、是れは何うなります……」「控へッ、座が高い、
退れッ」「ヘーン……」「ヘーンと何んじや退らか」
打つて變つた有様に今度は亭主は面喰つてコッ〜逃げ出そうとするのを光
圀卿はお呼び止めになり「イヤ、夫れには及ばぬ、御亭主、夫れに居つて
も宜しい」「でございすか、併しお客さん貴郎は一体何んでございす」

「コリヤツ、無禮を申しては相成らんぞ」「イヤ、叱るな、時に栗田」「ハッ」「聊か尋ねたき儀がある」「ハッ、如何ようの御事で……」
 奉行もビク／＼しながらお言葉を待つて居る。光圀卿は徐ろに仰せられた。
 餘の儀では無いが、前刻是れなる亭主を以て敵討ちの願書を差し出さしたるに許されたる剩つさへ予等は此ところに止まり居れば富家にまで咎めがある。申したさか是れは一向に解しかねる、如何なる所存である語つて聞せへ」「ハッ……」と返答に詰つたが稍あつて「恐れながら夫れは何かの間違ひと存じまする、決して左様の儀を申しましたる覺へはございません」「フム、そうならでは適はぬ答……御亭主、聞く通り奉行は左様の覺へは無いとあるが何うじや」
 亭主は最初からの様子を飾はく／＼聞て居つたが光圀卿の雲行が宜いと見て俄かに強くなつた。

「モシ御奉行様、今更らそんなことを云ふて貰ふては私しが困ります、前刻貴様が恐ろしい目をむいて、仰言たじやございませんか」「コレ、亭主、控へッ、尊き方の御前であるぞ」「誰れの御前でありましたも私しは嘘を言ふのは……」
 「コリヤツ……」
 奉行は七面鳥のように顔色を變へて亭主の言葉を押へようとして居る。
 光圀卿は是れを御覽になつて「ハ、ハ、ハ、御亭主、夫れでよい、最早用事が無いから一寸下へ行つて下され」「でございませうか、左様なれば御用かありましたなれば何うかお呼びを願ひます」と云ひ捨て立ち去つた後で光圀卿はキツと威儀を調へ何事かお言葉を出されようとする時、今降りた亭主は慌たしく駆け昇つて来た。
 「モッ、申し上げます、只今澤山なお役人が駆け付けました、オ、最早此處へ上つて参りました」と云ふ聲の終らぬ内、バラ／＼と二階へ駆け上つた二

三十人の捕夫、手ん手に十手を振りあげて光圀卿のお居間へ亂入しようとしたが奉行が恐れ入つて控へて居る体に案外の面地で躊躇して居る。

夫れと見た奉行、キツと其方を睨んで「コリヤツ、何事である、無禮者めツ

「ヒヤツ……」「尊き方の御前であるぞ控へツ」「恐れながら申し上げまする

只今承まはりますれば亂暴者が御奉行を……」「控へツ、此方は御前より態

々お迎へを頂いたるが爲め馳せ参じたのじや、馬鹿ツ」「ヘーン……」「早々

に引き取らぬか」「へツ……」「コレコレ栗田」「ハハツ」「叱らすさもよい

其者に聊か用がある」「ハツ……」「近頃家老の支蕃は如何に致して居る」

「ハツ、相變らず壯健に日々出仕致して居りまする」「夫れでは丁度よい、久

々にて對面致したければ彼れなる者の内、誰れか遣はして貰ひたい」「畏こま

りました」「書面を認ためるであらう」「ハハツ……コレコレ誰れか一名残つ

て他の者は早々引き取るよう」「ハハツ……」

そこで捕吏の内一名だけ残つて他は狐に捕れたような顔をして引き取る、光圀卿には總て一通の御書面をお認めになつて奉行へお渡したなるを奉行から残つた捕吏に云ひ付けて家老池田玄蕃の許へ走らせた。

其後で光圀卿は奉行に向つて仰せられる「處で前刻願書に認めた通り渡邊

源十郎の爲め是非に望みを遂げさせたいと思ふか城内に石田三兵衛と申すもの

は居るであらうな」「ハツ、御意の通り先般仔細あつて御家内の鳥取侯よりお

預かりの人のござりまする、確か武道の達人と聞き及びまするか」「如何にも

そうあらう、其者の本名は石塚三之丞と名付け元は讃州高松の浪人と聞き及

ぶが夫れに相違は無いか」「其儀は委しくは存じませれど、當時は殿の非常な

る御氣に入りにござりまする、尤も御前の御助太刀と存ぜずさは申せ前刻の

御願書により敵討ちの儀を差し止めましたも畢竟は是れが爲めにござります

るなれども」「如何に池田侯お氣に入りさば云へ一國の城主たるべき者は大義

「美しい」「心得ました、然らば是れにて御免を蒙りまする」さ支蕃は城内へ引
ッ返した。

處が一方の奉行栗田半兵衛は光圀卿の前でこそ仕方は無いからへエ、云ふ
て居るものゝ兩士に不意打ちを喰ひ、當身まで當られて氣絶中に引ッ謀られた
のが憤慨けば又た旅籠屋の二階で油を取られたのも快くは無い、其上自分の
手紙へ願ひを出し話した細々とされたに抱らす上役とは云へ家老を呼んで夫れ
にも話をするさ云ふのも面白く思はぬ、そればかりか石田三兵衛は殿のお氣
に入ればかりか自分も常々引き立て、貰ふて居るから影からぬ恩があるさ云ふ
風に利己主義から割り出して、何も光圀卿へ左程迄義理を立てるにも及ばぬ此
奴は一番寢返りを打つて石田の味方になつてやる方が此後の爲めさもならうと
淺幕な考へを起して松屋を出るさ其足、石田三兵衛を訪ひ詳しいことを悉皆
話したから流石の石田も驚いた、けれども元來が奸智に長けた奴だけに

早速腹を定めて池田侯の御前へ出た。

「ハ、ツ、上様には何もさても麗はしき尊顔を拜し奉つり石田三兵衛祝着至
極さ存じ奉つりまする」「オ、三兵衛、苦じふ無い近ふ參れ」「有がたく存じ
奉つりまする、就きましては斯く申す三兵衛、甚だ卒爾ながらお願いござり
まする」「ホ、何事である、苦しふ無い申して見よ、次第によれば許して
取らせる」「ハ、ツ、實は餘の儀にはござりません、何卒切腹の儀お許し願
ひたく」「コレ、何んさ云ふ、今一應申して見い」「ハ、ツ、恐れながら某
し切腹の儀御許し願ひたく……」「ナニ、切腹さか、夫れは容易ならぬ願ひ、
自体何が爲めに切腹さか、委細を申して見よ」「ハ、ツ……」と語つたのは先
年高松侯に仕へて居る頃、同藩の者と武道の試合中、當方から打ち込んだ太
刀先が相手に當り處が悪かつた爲めか其後間も無く夫れが原因となつて亡した
處が此度聞き及ぶに其者の一子源十郎なる者、某しを父の敵と附け狙ひ、奉

ぬよう注意を致しくれい」「ハハッ、畏まりました。就きましては御前の御登城は明日にても……」「されば、此度は従三位の位を以て登城致す考へであれば池田侯の都合を開き合せられるよう」「ハハッ、心得ましてございませう。御漫遊中御微行でアラリと登城せられるのなれば何んでも無いが従三位の位を以て御登城さなる諸般の儀式があつて中々大層である。常々御質素の光圀卿には殊更ら何故此の大層な儀式によつて御登城を申し出られたか云ふに池田侯は何分に、施毛の少々曲つた方である處へ側に奸臣があるさすれば中々一筋縄では此度のことは果しかれる、隠居の光圀が微行でもつてコソコソと登城し、口を極めて云ひ渡した處で容易に聞き入れるような人では無い、夫れよりも位を以て公式に登城をすれば當方は従三位前中納言、先方は只の従五位下であるから筋道さへ通れば聞かぬ譯にはゆかね、否、假令筋道が通らずとも位陸に對しても言葉を返す事は出来ぬから其方は聊か大層であるけれども

話して手ツ引り早く片付くであらうとお考へになられたのである。

○國遠をしたくても出来ぬ

玄蕃は光圀卿のお言葉によつて其趣きを池田侯へ早速言上に及ぶと池田侯は大に驚かれた。「光圀卿公弓の登城さあれば捨ておくわけにはなりかねるさ云ふて第一に困るのは三兵衛の一件だ、如何に目下の者さは云へ一旦は助けるさ云ふた言葉もあれば是非とも助けねばなるまい、だが一方では光圀卿から其事を申し出されては邪が非でもお受けのせぬ譯にはゆかねがサテ此の始末は何うしたものであらう」といゝ考へた末、家臣を遠ざけ密かに三兵衛を呼び出した。

「三兵衛、實以て怪しからぬ儀が出来致したぞ」「ハハッ、恐れながら如何ようの御儀にござりまする」「されば、餘の儀では無い、此度水府公には従三

位の位を以て登城せられるさある、さすがに其際前刻其方の申した敵討の儀を予に申し万一申し聞されるようのごさがあれば是れを拒む譯には相成るまい、さ申して一旦其方に誓ひし上は予は飽までも其方を助ければ相成らぬ、就ては何うじや其方は暫時何れへか國遠を致しくれまいか」「ハ、ハ、ハ、是れは身の餘りましたる有り難き御言葉、慎しんで御受けを致したくはござりますれど、夫れにては某し甚た卑怯の振舞とも相成りますれば此上の御願ひ、前刻御願ひ致しましたる通り切腹の儀お許しを願ひ上げまする」「アイヤ、夫れは相成らぬ、一旦其方を助くるさ固く申した上は飽までも助命致したき存意である、殊に位階に恐れ水府公の威光に挫かれ予の存意を挫けたさあつては諸國への聞へも面白く無い、夫れにしても其方は如何に致すとも國遠は相成らぬさ申すか」「御意にござりまする、加之す御家老玄蕃殿の御計ひを以て御城外の要所へに御家人を配り、某し何れかに逃れ出でんを慮ばかり嚴重に固め居ります

さやら奉行栗田殿より聞き及び居りますれば万一國遠の際是等の者に見告められましては武士としての耻辱さござりまする」「ナニ、玄蕃の計ひを以て……不埒なる奴、玄蕃を呼べッ」「恐れながら殿、御立腹の御事さは存じますなれども只今事を荒立てましては水府公の思召しも如何ぞ存じますれば此儀御見合のほど然るべきかご心得まする」「フム……なれども予も其方に誓ひたる言葉もある、水府の覺へ如何あらうとも予の申せし言葉は反古には致さぬ、如何あらうとも是非に其方を助命致して取らさぬば……」一度口外した言葉は邪が非でも徹さればならぬと例の施毛の曲つた地金をソロ、現はしかけた、三兵衛は是れを聞いてニッコと譏笑み。「左程まで仰せ下さりまする御言葉に付き恐れながら伺ひ上げまする」「フム、何んじや申して見い」「ハ、ハ、ハ、すれば水府御老公には如何あらうとも某しを御助命下さりまするの仰せ、心肝に徹して御恩相忘れませぬ、就きましては某

しの一命を安全に助かるべき道、只一つござりまする」「オニツ安全に助命の道さか……」「ハッ、なれども一大事にござりますればお許し願ひますも餘りに恐れ多く……」「イヤ苦しふ無い、如何よの儀なりさも取り計ひ得させる

酩酊なく申して見い」「ハッ、然らば御免を蒙りまする」池田侯の側近く欄り寄り、耳に口を當て、何ごさか云ふ處があつた。

「斯様に取り計らひますれば今度のみならず長く心安く存じまする、又た水府公にありまして御登城こそ官位ではこそあれ此度の御漫遊は御微行にござりまするにより家中の方々こそ秘し居りますれば他に洩れるべき憂ひは更らにござりませぬ」「フー……なれども夫れば首尾よく参るであらうか」「ハッ其儀は万事胸にござりまする」「然らば其方宜しうに計らへ」「ハッ、畏まりました」さ何事が密議する處あつて三兵衛は退出した。

話し代つて光圀卿には松屋の二階で池田侯からのお使をお待ちになつて居ら

れる、明日巳の刻に御登城下さるよう改ためて通知があつたから源十郎にお向ひになり。

「源十郎、最早安心致すがよい、明日予が登城致せば池田侯は三之丞の三兵衛を如何に助けようさせられるも拒むことは出来得ぬ筈、さすれば其方の多年の大望も近々には果すことは出来るであらう」「ハッ、何かさ御取りなし、厚く御禮を申し上げます」「フム、就ては明日予の登城の節、其方も予も家臣として供を許すこと、致すが城中に於て万一目指す敵に對面を致すことも決して何等の手出しを致しては相成らぬぞ」「ハッ、心得ましてござりまする」それからいよく、その他にお心付ける處があつて其夜は快よくお寢みになられた。

明くれば池田侯と御尋面の當日、巳の刻云へば今の午前十時であるから九時過ぎる頃には城内からお迎への乗物を松屋の門口まで過す、其内に時刻は追

々に移る。光圀卿は何處から御手廻しになられたか三位中納言の束帯をお着けになり、是れも御近臣の風体となつた佐々木、握美の両士の外、源十郎をもお連れになつて呆れて居る亭主の前をスラリ／＼とお運びになつてユツタリお乗り物に召される、尤も萬五郎は以前は以前であり且つは万一産粗あつては相成らぬと云ふことからお留守に残してをかれた。

さていよいよ行列が進まれるとお供の三名は駕籠脇につき八方に目を配つて護衛を申し上げる。

こんな風で無事に登城に及ばれる。池田侯は仕方が無いから玄關口までお出迎へを申し上げ身先立つて大廣間へ御案内を申し上げ、するとお供の三士も御近臣と云ふのでお側を少しも離れず光圀卿は設けの上座、御間の御着席せられるに次で其後の方に儼然と控へた。

そこで池田侯は御前に出て御挨拶を申し上げる、續て家老以下老臣の面々夫

れ／＼一順に拜謁を願ふ、夫れがら光圀卿と池田侯との間に四方山のお話しがあつてだん／＼源十郎の敵討のことに進んだ。

光圀卿から其事について怨々とお話があるから池田侯もお受けをせん譯にはゆかぬ、ニヤフヤながらよい加減な御返事を申し上げて居る、處へ御茶坊主はお次ぎの間からお茶とお菓子とお菓子を持つて出た、三十五万石の太守から中納言へ差し上げるお茶とお菓子だから中々立派なものである、茶器の立派なば云ふ迄も無く、夫れに入れたお茶は黄金色のトロリさして見たゞけでも胸がスツツさしそうなところへお菓子は又た結構な高蒔繪の菓子盆に頃の落ちそうな山を盛つてある、夫れを先づ光圀卿の御前へ差し上げ、次でお供の三士へも別々に差し出した。

○ダク／＼と黒い血を吐いた